

第5回伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会会議録

1. 開催日 令和8年5月25日（月）
2. 場所 本庁舎5階 501会議室
3. 出席者 野中章久、森下光子、泉川道子、山田長生、川瀬成清、中林有美、松森芳子、吉田具示、中浦順一郎、前川良文、桃木弘美、中井奈緒美、松裏充彦、村山邦彦、福地和幸、株式会社フジヤマ（技術者5名）
4. 欠席者 南友照、唐澤寿江
5. 事務局 福山産業農林部理事、吉福農業振興課長、服部農業振興課獣害対策室長、山添農業振興課主幹兼農業政策係長、藤森農業振興課主幹（農業政策担当）、半田農業振興課農業振興係長、大谷農業振興課主事
6. 案件
 1. 高校生を対象とした農業に関するアンケートの結果報告
 2. 伊賀市夢のある農業振興計画（案）
 3. タウンミーティングの実施方法等
 4. その他
7. 会議の次第（午後1時30分 開催）

（野中章久委員長）

お忙しいところ、ご参集いただきましてありがとうございます。

定刻となりましたので、会議を始めさせていただきたいと思います。

ただいまから第5回伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会を始めさせていただきます。

ただいまの出席委員数は14名でありまして、過半数のご出席いただいておりますので、設置要綱第6条2項に基づき、会議は成立しております。

なおですね、本会議は伊賀市審議会等の会議の公開に関する要綱第3条により、会議を公開し、会議の傍聴を認めております。報道関係者の撮影等について、ご了解いただきたいと思います。

会議の内容は録音し、発言に沿って議事録を作りますので、それをまた後日ですね、公開しますので、ご了解いただきたいというふうに思います。

事項に入れば、今日はちょっと盛りだくさんなので。効率的なご議論、効率的だと言っても発言を是非していただきたいので、活発な発言をよろしくお願いしてありますが、配布資料についてですね、確認させていただきます。いいですかね。

事務局から先ほどもお声がかかりましたけれども、前もって郵送されてますので、それです。もし、議事が進んでいく中で、あれ無いぞっていうときには、ちょっと事務局の方に目配せするなりしていただければですね、補充していただけるかなというふうに思います。

次にですね事項に入る前に、委員の交代があったと思うんですね。

事務局から説明していただいたほうがいいということになりますね。そちらの方説明をお願いします。

(吉福農業振興課長)

失礼いたします。伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会の委員構成などについて変更がございましたので、ご報告をさせていただきます。

お手元に配付の伊賀市夢のある農業振興計画策定委員の皆様の一覧表をご覧ください。まず2号、公共的団体等を代表するものの欄をご覧ください。

このたび、三重県伊賀農林事務所の所長に、山田長生様が就任されました。そのことに伴い、前委員の行方典子様からは委員を辞職する申し出があり、山田様からは委員への就任を承諾いただきましたので、令和8年4月1日付で当委員会の委員にご就任いただきました。

次に、1号、学識経験者の泉川道子委員におかれましては、このたび愛農学園農業高等学校の校長に就任されました。

なお、当該一覧表における各委員の皆様の記載事項について変更などがございましたら、お申し出いただければと存じます。

説明は以上でございます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。それでは、山田様から一言ご挨拶いただければと思いますけども、よろしくをお願いします。

(山田長生委員)

行方の後任としてきました山田といたします。よろしくをお願いします。

私は、津から通っているんですけども、出身が松阪ということで、実家の方では田んぼと野菜を、父母が耕作しているという状況でございます。

父母が高齢になってきていますので、機械に乗ったりするのは私というような、そんな状況です。

私、もともと林業が専門なんですけれど、日常的にはそういった農業のこともしていますので、ぜひ、夢のある振興計画ということで、そこにお役立ちできればというふうに考えています。どうぞよろしくお願いします。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。よろしくをお願いします。

それではですね、事項に沿って議事を進行したいと思います。

第1項、高校生を対象にした農業に関するアンケートの結果報告を議題とします。

事務局から説明をお願いしますが、これちょっと、あれ、これ聞いてないよっていう方もいらっしゃるかもしれません。議事の中で、委員の中で絶対にやろうっていう話で出てたものではないんですけども、これを実施する機会がありましたので、調査活動の一環

として、高校生のアンケートやったというふうなことだと認識しております。

ですから、調査活動の追加情報として、受けとめていただければというふうに思います。

それではこれ事務局の方からですか、説明をお願いします。

(山添農業振興課主幹兼農業政策係長)

失礼いたします。令和8年3月27日に開催した第4回委員会において、「伊賀市の農業及び農村の現状調査、分析の結果報告」として、農業者や農業関係団体などへのヒアリング、伊賀市内の農地の耕作者1,000件を対象としたアンケート調査などを実施し、伊賀市の現状把握に努めた結果をご報告させていただきました。

その際に、アンケート調査について、「高齢者の方が積極的に回答いただいたことはよかったですと考える一方で、若い世代の意見をもっと把握すべきでは」とのご意見を頂戴したところでございます。

それを受け、伊賀市内にある高等学校のうち、伊賀白鳳高等学校の生物資源科及び愛農学園農業高等学校の2年生及び3年生の皆さんを対象としたアンケート調査を実施し、ご協力をいただきました。

本日は、伊賀市夢のある農業振興計画策定委員会設置要綱第7条「委員長は、必要があると認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、その説明または意見を聞くことができる。」との規定に基づき、計画策定を支援いただいている株式会社フジヤマ様にご出席いただいておりますので、フジヤマ様より当該アンケートの結果を報告いたします。

そのあと、当該報告及び説明内容について、委員の皆様からご意見等を頂戴したいと存じます。

説明は以上でございます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。

説明が終わりました。この件に関して、いかがですか。委員の方から質疑、或いは何かご意見ありましたら。

内容を聞いてからまた、調査自体についてのご意見いただいても結構なんですけど、とりあえずは内容の方の説明をフジヤマ様からいただいてからということによろしいかと思っておりますので、フジヤマさんの方からお願いします。

(株式会社フジヤマ)

それでは、高校生アンケートの結果をご報告いたします。

資料①をご覧ください。資料①の1ページ、お願いします。

調査目的としましては、若者世代の意見を把握するために、若者世代の代表者として、伊賀市内で農業を学んでいる高校生を対象に、将来の進路意向ですとか、農業に対する意見、意識等を聞き取りました。

調査対象者は、愛農学園農業高校と伊賀白鳳高校の生物資源科の生徒のうち、2年生と3年生を対象に調査させていただきました。

調査方法、調査期間は資料の通りですが、学校にアンケートを配布させていただきました。回収数は94件、ご回答いただきました。

続きまして2番の調査結果のご報告です。回答者の属性。まずは、学年と性別は1ページの通りです。

2ページお願いいたします。伊賀市にどれだけ長く住んでいるのかというところを把握しなかったものですから、③番、ご実家の住所という質問もさせていただきました。どちらかというと、回答者の中では、伊賀市外がご実家という方の方が多かったです。

で、④番、家族や親族に農業をしている方がいるかという質問に対しては、農業をしている人がいるという回答の方が若干多い結果でした。

続きまして、(2) 農業に対する意識を聞きました。

①番、農業は魅力ある仕事だと思うかという質問に対しては、思う、強く思うという回答がほとんどを占めている一方で、どちらでもないですとか思わないといった回答も、若干数ありました。

その理由としましては、どちらでもないという理由については、環境に左右され安定しないためですとか、農業、仕事とすると、魅力というかわからないんですけども、農業自体は非常に魅力的だと思っていたとの理由が挙げられました。

あと、思わないと回答した方の中には、農業をやっている方が少なくなって人気なくなっているからといった理由が挙げられました。

続きまして、3ページお願いいたします。

②番の部分です。農業は自分に向いていると思うかという質問に対して、こちらについては、どちらでもないという回答が最も多かったです。

どちらでもないの理由としましては、まだわからないですとか、あと、農業は好きだけれどもあまり長続きしないと思うといった、理由がありました。

続いて3ページの下側、③番、農業で安定した生活を送ることができると思うかという質問に対しては、こちらもどちらでもないが最も多くて、次いで思わないという回答が多かったです。

どちらでもないというその理由については、簡単なことじゃないとか、気候や病気などのリスクがあるからという理由が挙げられたほか、思わないという理由については、金銭的な安定がないと思うからといった理由が挙げられました。

続きまして4ページお願いいたします。4ページの上段④番の部分、将来の自分が農業や農業関連の仕事に関わることをイメージできるかという質問に対しては、これはちょっと回答が拮抗しておりまして、思わない、どちらでもない、思うという回答が拮抗しております。

まず、その理由としましては、思わないという回答については、今は別の方向に興味があるから、あとはどちらでもないという回答については、まだ将来のことについて考えていないから、思うという回答については、就職するなら農業関連に就職したいが、そもそ

もまだ進路がふわふわしているといった理由が挙げられています。

関連して、(3)の卒業後の進路はどのように考えていますかという質問に対しても、まだ決めてないという回答、あとは農業分野の進路は考えてないという回答が最も多かったです。

続きまして、5ページお願いいたします。

(4)番で、農業が将来の進路の選択肢になりにくいとしたら、その理由は何だと思えますかという質問に対しては、収入が不安定そうだからという回答が61件と最も多かったです。次いで、農業を始めるためのお金がかかりそうだから、農業以外にやりたい仕事があるからといった回答が続いておりますが、お金の面に不安を感じている生徒が多いことがわかります。

続きまして、6ページお願いいたします。

(5)番で、若い世代の方が農業に関わりやすくするため必要だと思うことは何かという質問に対しましては、収入や働き方の実態を知る機会があることという回答が41件と最も多くて、次いで農業機械や農業施設の導入、就農準備への支援があること、あとは、住まいや生活面の支援があることが28件ずつと続いておりまして、それ以外の回答については、あまり差が見られなかったです。

続きまして、7ページお願いいたします。

(6)番で、農業をより魅力的で夢のあるものにするために重要だと思うことは何かという質問に対しては、若者向けの就農支援を充実させることという回答が49件で、特に多かったです。続いて、学校給食や地産地消の取り組みを進めることが33件、農業と地域での暮らしの両立を支えることが28件、販売、販路の拡大やブランド化を進めること27件と続きました。

続いて、8ページお願いいたします。

(7)番で、若い世代の方が伊賀市で働いたり暮らしたりする上で重要だと思うことはなんですかという質問に対して、これは農業に限らずというところなんですけども、こちらについての回答で最も多かったのが、安定した収入を得られる見通しがあることが44件、続いて、魅力的な仕事や働く場があることが41件、買い物、交通、医療など暮らしやすい環境が整っていることが33件と続いておりました。

高校生に対するアンケートの結果報告は以上になります。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。実施したのは市内の2つの高校ですね。

そのうち対象の1つがですね、泉川委員のところなんで、ぜひ一言お願いしたいと思うんですが、いかがですかね。

(泉川道子委員)

私よりも多分、農業の教育を実践している農場長の三野守というのがおるんですけども、彼に是非聞いてみたいということであっさりと言葉を書いてきていただいたので、読

ませていただきます。

農業者や地域を担う村づくり、人づくり、誰でもそうしたいと思うにはその魅力やその生き方に共感するような経験が必要。農業の実際を体験することはもちろんですが、農業を生き方として、また実際の生活や日常において楽しんでいる人との時間、やりがいを感じられる体験ができるといいなと思います。

ただ、それはきっかけや出会いのようなものであるので、その体験をできれば、何回も経験してもらえると、より自分の生き方に近づけていけるのではと思います。

まずは興味を持つこと、大変だけど、楽しいと思えること、好きになること。そして、アンケートにもありますが、どうすれば経営や生活として成り立つのかという確認や実感を持ってもらえる経験や学びが必要で、愛農高校だと、それが単純に授業だけというよりかは、実際の農家実習の中で経験として学んでもらっています。

これは愛農の場合、1年生のときに10日間、農家にファームステイをする、前回も言いましたけど、2年生のときに北海道実習で体験するっていうような農家実習のことです。

学校はあくまで、実際に農業をするよりも数歩手前の体験でしかなくて、実際の農家で、実際の農業を通して、長いスパンで暮らしの中で体験する中で、農家ってどんなふうな生活しているのかなとか、そういう、どういう経営をしているのかなとかそういうことがより確かに、将来に繋がる経験になっていると思います。

地域を担う、地域に残って、地域に関わりながら、地域を盛り上げていける人を育てていくのも、そのこと自体が自分にとって大事なことだと思えることが必要なので、その活動や生き方をしている人との接点や、一緒にその時間を共有していく経験や機会があるといいと思いますっていうふうに言ってくれています。

これは、今後農業アカデミーを、ここでビジョニングしていく上で、とってもいいアドバイスになるんじゃないかなと思って、ちょっとシェアさせていただきました。

以上です。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。この件に関しましては、このアンケートに関してご意見、ご質問等ございましたらお願いします。

いかがですか。委員の方から。

ちょっとね、何かちょっと読み方が難しいですけどね。

農業高校行ったのに絶対やんないぜって言ってんの多いねみたいな話は、ただ一方で、不安に思うのが、やっぱり安定的な収入が、ちょっと予想するのはなかなか困難かなみたいなことが書いてあるので、当然ね、自分の人生、所得が安定してないのに夢かけるってのはちょっと難しいと。

特に経験のない、高校在生とかだと、そういうのがなかなか。それこそ大学生だって同じですから、そこはちょっと何ていうか、農業という生業っていうか、食に対する魅力

を感じているってことと、生活を成り立たせるっていう2つの面を両立させていかなきゃいけないわけですから、若い人は。そこでの難しさがあらわれているのかなっていうふうな感じがしましたけども。

はい。いかがでしょう。

参考資料ということで、言い方を変えると、こういう状況の中でどうやって夢を描いていくかと。将来には、伊賀農業に対してということですので、ベースの資料として、調査報告が出ているかなというふうに感じますが、いかがですか。

ご意見等、いいですか。

はい。どうぞ。

(福地和幸委員)

失礼します。福地でございます。

先ほどから説明をいただいた内容をですね、事前にいただいたこの資料でもって、自宅で拝見をさせていただきました。

現在の高校生がですね、2年生、3年生という立場で、これほど農業をシビアに見ている、正確に考えられているっていうことにつきましては、非常にうれしく思いました。

特に、データの中にもありました、現在の農業に対する不安っていうものを、本当に受けとめ方がシビアである。将来についても、そういった、今委員長も言われたような不安、これをいかにして払拭するかっていうのは、私たち生産者の問題でもあるし、前回の委員会のときにもお話をさせて、発言をさせていただいたところなんですけれども、私達そのものが、手待ちをしておるといふような状況であったら、今ここに出てきたアンケートの内容とリンクすることはまずないというふうに考えています。

私たち生産者そのものも同じような努力をし、試行錯誤しながら、体験という今言葉をたまたま出されましたけれども、安直な表現でいいますと、手っ取り早く実体験として、経験で農業をしてるところに入ってきていただく。研修という言葉はどうかと思いますけれども。実際に私たちがやっておる、農業に対する理解を1歩でも深めていただけないというふうな流れを作るのであれば、やはりそういった内容について私たちも提案をし、それから現在の高校生に対しても来ていただくというふうな方向っていうのはすごく大事だと思います。

不安があるし、どうしたらいいのかまだ高校生ではわからない。私たちが今も申し上げましたように、やはりそういった部分で少なくとも、多少なりとも払拭できるような努力を生産者としては続ける、発信していく必要があるというふうに強く感じたところでございます。

このアンケートを見まして、2年生、3年生の生徒さん方がですね、彼ら彼女らがもうリアルタイムで進学をされたり、或いは就職をされる、その選択肢の中に、是非とも農業というものに対する魅力を発信するという努力を怠らないとともにですね、このデータ

をもとにして、頑張っていきたいなあというふうを考えておる。

もう1つは、せっかくこのようなシビアな回答をいただいたこの結果をですね、もしできることなら、回答いただいた子どもたちに、結果的にこういうふうなことを両校の生徒たち、自分たちの仲間はこういうふうに見てたよというのをフィードバックさせてあげる、或いは今回のような発言をですね、委員会ではこういうふうなことを発言してる生産者もいたというふうなこと、或いは横の串通しを、風通しを良くするための行政であったりJAさんであったり、我々生産者がですね、どういうふうなアクションを起こすかというふうなことも、伝えていけるというふうなタイミングがあればですね、もっと、子どもたちも魅力を感じるということに繋がっていくのではないかなというふうに感じました。

今回いただいた高校生の皆さんのアンケートは、非常に私自身が生産者として大変うれしく思って、子どもたちにも、いや、子どもたちといますか私の子どもと私は2人で10ヘクタールほどしかやってないんですけども、伝えるとともにですね、地域の若い人たちに対する目線も、これをもって少し変えていけるかな自分自身がっていうふうなところにも、今、気持ちとしては繋がっているのが現状でございます。

話はいろいろ多岐にわたってしまってますね、終わりのないたびではいけませんので、発言としてはこれで、私としては非常に満足のいく内容であったというふうに思い、実施していただいた関係している皆様方への感謝といたしますか、回答いただいた子どもさん方にもお礼を申し上げたいなというふうなところでございます。

以上です。

(野中章久委員長)

ありがとうございました。

お願いします。

(泉川道子委員)

愛農高校も、何とかこの伊賀地域で卒業生に就農してもらいたいっていう思いもあって、ここ村山さんもいらっしゃるんですけども、へんこなどで今までお世話になったことがある卒業生もいますし、森下さんの地域のところで、新垣さんなど今も世話になっているっていう1つ1つの事例があるんですけども。

やはり生徒も不安に思っているように、安定した収入というか、そして自然災害などによるすごく煽りを受けやすい職業ですので、農業というのが、何かあったときにどう保証するか。

日本の国が、なかなか農業に対するその補償制度というのが、海外などに比べると本当に少ないので、そういうところも伊賀市の方で充実させていくとか、伊賀市に来たら就農しやすい、伊賀市で農業したら農業者は何か食べていけるらしいねみたいな噂が広がるぐらいの、伊賀市が農業で大事にしてるっていうことが全国にわかってもらえるような、ちょっと言い過ぎかもしれないんですけど。そういう場所にここがなったらもっと素晴らしいなって思いますし、せっかく高校で有機農業やってるので、有機農業だけじ

やないんですよ、農業なんでも大事なんですけど、特に有機農業が、自然災害やその害虫や、そういうものの、この辺は私なんかよりいっぱいご存じの方いらっしゃるのですね。なんですけど、大変さをこう理解してもらえる場所でもあるっていうような、そういう農業のやりやすい場所でもあるっていうふうなところになっていけば、私も安心して卒業生を、せっかくなんやから伊賀市で就農したらって言ってあげれるようになるなってちょっと思ったりしました。

以上です。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。この件に関して、他にございますか。

いいですかね。

なんかちょっと、僕の私見を述べさせていただくと、僕も学生、大学生なんですけど、接してる中でいくと、ある意味なんかすごく大人ですよ。大学生だと、お前どうやってお金稼ぐかイメージするかっていったら、正直働きたくないですみたいな感じの学生が多くて、まだ自分に翻って自分が大学生とか高校生の頃なんかほとんど、何となく時代が甘かったですからね。僕、昭和の時代なんでね、右肩上がりですから。何か要するに飲んだくれてアル中になったりとか、ギャンブル中毒にならなかつたら日本だったら生きていけるよみたいな時代だったので、何とか金なんて普通に来たらいいみたいな感じで思ってたし、今の大学生、もうちょっとシビアなのかなっていったら、お金貯めるために先生に言われてNISA始めましたみたいなことは言うんですけど、じゃあお前どうやって職業、キャリア展望するっていったらうーんみたいな、正直働かなくていいんだから働きたくないですみたいな話ですからね。

それに比べると、やっぱりちゃんと収入が安定しないというところを見てますし、ただ一方でちょっと希望的にすごいなと思ったのが、結構ね、将来の自分が農業や農業関連の仕事に関わることがイメージできますかっていうのに対しては、思うとそう思うで3割超えるんですよ。

結構やっぱりちゃんとね、それは農業高校に来てるからそう思うっていう感じかもしれませんが、農学部来てもそう思いませんから。

それはなんか、やっぱりこれ何となく、確かにちょっと難しいところありますよね。高校受験は中学生のときに選ぶ、人生選べってこういうことになりますから。

大体、大学生だって18のときに選べって強制して、日本のシステムだと要するに試験を受けてみてよかったとこに来ちゃうみたいな。僕自身もそうですけども。そういう中でいくと、きちんと見ているなっていうのは思っているんで、こういうところですね、先ほどからいろいろご指摘ありますけども、リスクとかやっぱり安定しないとかっていうのは、ある種職業っていうことと、それに対する報酬ですよ。日本の社会が与えるその報酬の、ある種のアンバランスみたいのがあって、そこでやっぱりちょっと現実苦しんだなっていうのが読み取れるなというふうに思います。

ですからやっぱり、職業としてはこう、誇りを持って、喜びを持って、そこにあるんだらうって夢を描いてる姿がやっぱりちょっと垣間見えてて、それに対して、ですから何ていうかね、市の単位で、市場で決める価格を調整していくという能力は、当然政府にもないんですけど、それはやっぱりいろんな仕組みでですね、代替するような支え、生活とかを支えていくような仕組み、或いはその将来みたいなものですね、ここに彼らも言ってますけど、どういうところが暮らしやすくなる上で重要だと思いますかっていうところに、同世代の仲間と繋がりがあることとかって結構大きいじゃないですか。だからやっぱりコミュニティの中で生きていきたいというのは超強烈にやっぱり若い人も思ってるってこと。

それと、やっぱり当然収入はそれなんですけど、住まいが整っていることとかね、それから買い物とかが整ってることってのは結構大きいんですよ。当然そういう話なんですよね。だからそういうところで、いろいろ、暮らしぶりですよ。

あとはやっぱりコミュニティを大事にするってところが重要なんだなっていうのは高校生も思っているんだなっていうのが見えて、彼ら大人だよっていうのはちょっと感じましたし、逆に言うと、将来考えていく、こういった委員もですね、その辺を、基礎的な認識として持っていけばいいのかなあというふうに感じました。

ありがとうございます。

これ、参考資料だけど大事な話、認識ですので、共有化していただければいいと思います。

では次、続きまして次の議題ということで、振興計画案の方を議題とさせていただきます。ご意見を、また後で、やっぱりさっき言いたかったんだけどという、言っても結構ですが、とりあえずこちらの方に進めさせていただきたいと思います。

事務局の方から説明ですよ。まずはね。お願いします。

(山添農業振興課主幹兼農業政策係長)

失礼いたします。

令和8年3月27日に開催した第4回委員会において、「伊賀市夢のある農業振興計画(案)」についてご協議いただき、多くのご意見を頂戴したところです。その際に頂戴したご意見などを踏まえ、現時点における「伊賀市夢のある農業振興計画(案)」を作成いたしました。本案の内容について、第4回委員会に提示させていただいた計画内容からの追記や変更点を中心に概要をご説明申し上げ、その後、委員の皆様からご意見等を頂戴したいと存じます。

資料②をご覧ください。

前回案から追記や変更があった箇所については、朱書き等の色付け及び下線にて明示してございます。

1ページから4ページまでの「第1章 伊賀市夢のある農業振興計画の策定について」は、特段の変更等はございません。

5 ページから 30 ページまでの「第2章 伊賀市農業・農村の現状と課題」についてです。

10 ページをご覧ください。10 ページ以降において、農林業センサスを基に農業者や農地の動向を記載しているところ、農林業センサスについて、令和7年の数値が一部公表されたことから、更新できる項目について修正しております。

31 ページから 42 ページまでの「第3章 伊賀市農業・農村の将来像」についてです。

32 ページをご覧ください。伊賀市の農業及び農村の将来像を明記しております。伊賀市の総合計画において、伊賀市の目指す姿（将来像）として「すべてのひとが輝く 地域が輝く」を掲げ、農林業の目指す姿として、「人と自然が共生し、農林業を元気にする」を掲げています。

農業は、食料の供給という基本的な役割に加え、地域コミュニティの形成や防災・減災機能の発揮など、地域を支える多様な役割を果たしています。農業がもつ様々な役割が十分に発揮され、持続的で魅力ある農業を実現するためには、農業を担う農業者が、誇りと生きがいをもって農業を続けられる社会が望まれます。

また、消費者となる市民一人ひとりが農業の恩恵を理解し、農業を担う農業者への誇りや憧れを抱くとともに、地産地消を通して伊賀市農業の最大の応援団となる社会の実現が望まれます。

伊賀市が目指す「夢のある農業」については、農業は農業者のみが担うものではなく、市民みんなの営みにすることを目指します。

34 ページをご覧ください。「夢のある農業」の実現のために、伊賀市が掲げる基本理念を「伊賀らしい農業・農村の継承から広がる夢のある未来」と決めました。

伊賀には、古来より培われてきた「人と自然」「食と農」「多様な担い手」「環境との調和」といった自慢の資源が数多くあり、これまで築かれてきた伊賀の農業・農村を守り受け継ぐことが、夢を描く第一歩という想いを込め、農業の多様な担い手が、夢や誇り、生きがいを持って農業に関わり、それぞれの想いを実現できる未来を、「夢のある未来」としました。

また、基本理念の具体像として、伊賀市農業及び農村の「目指すべき将来像」をそれぞれ設定しました。農業の将来像を「すべての市民が誇りと生きがいを持って関わり続けられる伊賀の農業」とし、農村の将来像を「美しい風景の中で多様な市民が農の魅力にふれあえる伊賀の農村」としております。

35 ページをご覧ください。これまでに整理した伊賀市における農業・農村の現状と課題を踏まえ、先ほどご説明申し上げた基本理念と目指すべき将来像の実現に向けて、6つの分野別に基本方針を設定しました。

36 ページをご覧ください。6つの分野別の基本方針について、「現状と課題」及び「今後の方針」を整理しております。

「(1) 農業者に関する基本方針」である「担い手の育成・確保」ですが、現状と課

題として、農業従事者数のさらなる減少が予想されること、農業従事者数の不足から、農業生産基盤の維持が困難になりつつあること、農業への参入ハードルは高く、新規就農者の確保が重要な課題であることを挙げ、今後の方針として、経営継承や農地取得の円滑化、新規就農者の育成・確保を進めること、地域農業の担い手及び小規模農家や兼業農家への支援に取り組むこと、また、高齢者、女性、障がい者など多様な人材が生きがいをもって農業に関わることができる社会の実現を目指すこととしております

「(2) 農地に関する基本方針」である「農業生産基盤の保全」ですが、現状と課題として、施設の老朽化のある個所や区画整理未実施の圃場においては、効率的な農業生産が難しいこと、耕作放棄地の増加や鳥獣被害などが課題であることを挙げ、今後の方針として、土地改良施設の計画的な改修や再整備を進めるなど、農地、農村資源の保全に努めること、鳥獣害対策として侵入防止設備の維持管理、補強及び再整備を進めることなどとしております

37ページをご覧ください。

「(3) 農業生産に関する基本方針」である「農業生産の振興」ですが、現状と課題として、IGAMONOをはじめ多くの特産農産物が生産され、有機農業が盛んな地域である一方で、中山間地域や小規模な農家について営農の継続が困難であることや、水稲作や施設栽培については新規就農のハードルが高いことを挙げ、今後の方針として、持続可能な農業の推進を図るべく、関係機関と連携し、伊賀産農畜産物のさらなる生産振興に努めること、また有機農業や耕畜連携をさらに推進し、環境負荷を低減した農業の振興を図るとともに、条件不利地においても営農が継続できる環境づくりを進めることとしております

「(4) 農産物の加工・流通・販売に関する基本方針」である「加工・流通・販売開拓」ですが、現状と課題として、近年の物価高騰等による農産物生産費の増大に対して、農畜産物価格の向上が追い付いていないことなどを挙げ、今後の方針として、商業及び観光と一体となって、伊賀市内外の消費者に向けた伊賀市農畜産物の魅力発信に取り組むこと、またIGAMONOやIGAGREENといったブランド登録制度等を通して、伊賀産農畜産物の流通、販売の促進に取り組むことなどとしております。

38ページをご覧ください。

「(5) 消費に関する基本方針」である「食と農の関わりの推進」ですが、現状と課題として、「いがスマイル給食」などによる地産地消や食育の取組を進めている一方、農産物の生産費に見合わない販売価格や農村資源の維持管理活動などに対し、生産者だけでなく消費者も一体となって取り組む必要があることを挙げ、今後の方針として、生産者と消費者の交流を促進し、農業や食に対する消費者の理解、関心の醸成を図ることなどとしております。

「(6) 農村に関する基本方針」である「農村の振興」ですが、現状と課題として、農業従事者の高齢化や離農、人口減少などに伴うコミュニティ機能の低下などにより、

空き家の発生や地域文化の担い手減少などの課題が発生していることなどを挙げ、今後の方針として、農村環境の保全や、関係部局との連携による道路や住居などの生活環境の確保及び整備に取り組むこととしております。

これらの基本方針から導かれる基本施策及び個別施策について、40ページ及び41ページに表として整理しております。一番右にある「重点施策」の欄については、委員会での議論を踏まえて今後決定していく予定でございます。

43 ページから 62 ページまでの「第4章 基本施策・個別施策」についてです。

44ページをご覧ください。基本施策ごとに「主な関係主体の役割」を追記しております。当該計画については、伊賀市が策定する計画ではございますが、伊賀市だけで計画を達成できるものではなく、農業関係者はもとより、関係団体や市民の皆様がご協力いただくことによって達成できるものと考えことから、行政をはじめ、農業者やJA、土地改良区や市民といった、それぞれの主体が各施策に対して取り組む事項を記載しております。

この役割については、本計画の上位にあるものとして位置付けている「伊賀市産業振興条例」の第3条「基本理念」の規定に沿うものとしております。

63 ページから 64 ページまでの「第5章 評価指標及び目標値」については、今後の委員会での議論を踏まえ、そもそも設定するのか、また設定するとすればどのような指標や目標値が適切かを議論いただきたいと存じます。

65 ページから 66 ページまでの「第6章 計画の推進体制」についても、今後の委員会での議論を踏まえ、その内容を議論いただきたいと存じます。

なお、本案については、令和8年8月を目途に中間案としてとりまとめたと考えております。それまでの間、当委員会でのご意見や、7月に予定しているタウンミーティングなどのご意見などに基づき計画案をブラッシュアップしていきたいと考えておりますので、そのことを踏まえながらのご協議を何卒よろしくお願い申し上げます。

また、補足資料として、野中委員長からのご指示に基づき、計画案に記載の個別施策について、伊賀市における既存事業に対応及び関連する事業があるかを整理した表を作成しましたので、参考としていただければと存じます。

説明は以上でございます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。

今最後に言った、対応表は資料別、この案とは別のやつですよ。

補足資料ってやつですね。これですね。

ちょっとなかなか、基本計画の性質上ですね、網羅的なので、ある種、今までとどういう連続性があるの、補足資料に関してですけど、連続性があるのか、どこが新しくなるんだということを考えるときに、すでにある、走ってる事業と、ここが新しくなるよっていうのが対照表になるとわかりやすいんじゃないかなというふうに感じます。

ちょっと後で議論になれば、細かく見ていただければ、議論していただければいいと思うんですが、比較的従来なかったようなところが埋まるんだなっていうのはわかるようになるので、ちょっとこれは作っていただいてよかったなというふうに思います。

ここ一番、今日は時間取るべきところなので、皆さんにご議論をいただきたいと思います。比較的ですね、僕が見ているポイントとしては、例えば40ページ、基本計画の施策体系とかっていう形で、個別政策と基本政策と基本方針っていうのは、対応関係がある表とかですね、この辺見ていただくと大体どういうメニュー構成になっているのかなっていうのがわかると。

あとポンチ絵といいますかね、その前のページ、39ページに、図で大体この辺やりますという体系性、基本計画、基本理念が一応ある程度体系的に示されているので、個々の文言とか新しくなっていると赤くなっているのが新しいところですよという説明があったんですけども、ある意味すごく、全面新しいページとかいっぱいあるので、ちょっとその辺は、なかなかすぐには理解できない。

今日説明あったように、これから年月かけて議論するところですから、今日全部出せ、球出ししろって話ではないんですけども、その辺で整理しながら、それぞれご意見いただければと思います。特にですね、僕今日お願いしたいというか声を大にして言いたいのは、選出母体それぞれあると思います。平たく市民としてみたいなかテゴリーの方もいらっしゃるんですが、特にですね、実務で携わってらっしゃるところの方々は、ある意味人数からすると少ないにしても、実業で今こうなっているんだからっていうところを伸ばしていかなきゃいけない計画なので、もう積極的なやつにですね、うちの利害としてはこうなんだよみたいのところもですね、ある種腹を割って、正直にといいますかね、ご遠慮なさらずに、その辺はむしろ選出母体のカテゴリーの利害関係にのっとして発言いただくということもですね、とっても重要なところだというふうに思っていますので。

例えば、ある種これ議論するときには、ちょっとなかなか難しいよねってことも書いてあるので、例えば価格が出てる、牛に関してちょっと件数少ないじゃないかみたいな話は当然あるかと思いますが、もちろんそういうふうになってしまうので、そこはだからもっと充実させてくれとか具体的に書くべきだというご意見いただければ、非常に話が前に進みますので。今、例として牛を出しましたけど、必ずしも牛にそういうご不満あるとは思ってませんが、例示としては、そういう話です。

何かこういう場に出てくるとですね、日本人の特徴で、ちょっとでも全体からするとこちら少数派だからっていうんで遠慮してしまう傾向があるんですけど、むしろ逆です。少数派の方であればあるほど、声を大にして主張していただいた方がですね、社会全体としては前に進みますので、ひとつその辺を、遠慮なくご発言いただければと思います。

はい。お願いします。

(泉川道子委員)

33 ページの、伊賀市が目指す夢のある農業っていう。作っていただいているところのそ

の10年後の農村の姿で、市民一人一人が伊賀市の農業、農村を誇りを持って語れるっていう、一部の生産者と多くの消費者の10年後と、それから若者世代が市の農村に希望と憧れを抱き、次の世代につなげるっていう、生産者目線のビジョンと2つ載ってるんですけど、この、なんていうんですかね、私なんかよりもぜひ中井さんとか村山さんにしゃべって欲しいんですけど、いいものを作ってもなかなか売れないっていうか、伊賀の人たちが本当にそれを手に取ってもらいにくいっていうか、結局消費者教育っていうとすごいおこがましいんですけど。何というんでしょうか。やっぱりこう、おいしいよねって一緒に食べてわかちあうみたいな。

あとはそのコミュニティサポートアグリカルチャーっていう言葉があるんですけど、やっぱり自分たちが買い支えて農家さんがやっていけるっていう、そういう自覚っていうか、そういうのもっとダイレクトに何か持てるような場があったらいいんじゃないだろうかとちょっと、すいません、とてもおこがましいんですけど、思ったりしました。

(野中章久委員長)

関連してどうですか。発言してよって話があったんですけど。大事なところなので。

これに関しては僕もね、実は3時間ぐらいは議論したいみたいな感じの話なんですけど、お願いします。

(村山邦彦委員)

ありがとうございます。

今、泉川先生おっしゃっていただいたのに関連するっていうか、僕の方、今の話を拾って、56 ページあたりの販売、流通、促進あたりがちょっと流通事業もやってるもので、ちょっとその辺の観点から今の話を繋いで思ったんですけど。

やっぱりちょっとこの販売拡大ブランド力の向上っていうのが、どっちかという対外的なPRをやって終わりっぽい感じがちょっと印象として受けて、実際物を動かそうと思うと、やっぱり流通やっているとそのロジスティックとか、例えば給食でも、たまたまできちゃったから買ってくれるってことはなくて、1年前から例えばキュウリをこのメニューで使うからっていったら種を蒔けるんですけど。なんかそれをやってないで、大体今入札なんで、1ヶ月前になっていきなり出せる人というような形になってて、構造的にそのロジスティックとか年間の作付とか、そういうところちょっと行政とか少しメタなレベルで調整しないと、地産地消って現実的にめっちゃめっちゃ難しいと思うんですよ。

だから、直売所でたまたま出てきたものを、何かPRだけで何とかしようというのはおそらく難しく、何かちょっとそこら辺が市の行政でせつかくいうんだったら、もうちょっとサプライチェーンっていうか、地産地消っていうのを現実的にどう実現するねんって、これ多分今の時点だとほぼないと思うんですよ。PRしましょうみたいな話しか。

だから、現実的にサプライチェーンどうすることによってっていうのをせめてヘッドクォーター置くとか。何かそういったことがちょっと入ったほうがいいんじゃないかなっていう気はしましたね。

特に給食とか、ちょっと有機とも、I G A G R E E Nの話とかとも紐づけて書いていた
だいてるんですけど。給食とかもやっぱり、僕もその生産者の人から聞くんですけど、
今センターになっているのでめちゃめちゃボリューム多いんですよ。だから例えば小松
菜出してっていったときも月2回ドーンって注文が行くときに、ありゃいいけどそんな
ん待ってくれへん状態のやつを突然出してって言われて出せるところってかなり大きい
ところで、余力がないとできないんですよ。そうすると、必然的に伊賀市、名張市周辺
では買えなくなって、もう市場で買ってくるしかないっていうふうになるんですよ。

だけどそれが、例えば年間でも給食センターが1年間の買い付けメニューを出しとい
てくれて、市内の人で作成しましょうとかいうことができるんであればね。だから単品単
品で今世の中の農業ってもうマッチしちゃうんですけど、ローカルでやろうと思う
と多分意外とそういう調整、意外とテクノロジーがいると思うので、誰がどこに作付けて
どうするっていうデータベース的なものもあるし、ちょっとその辺の目線が入って欲し
いなという。

何かちょっと綺麗事だけで終わっちゃうとちょっともったいないなって感じがちょっ
としていますという個人的な意見でした。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。

地産地消とか地元消費っていう話なので、これちょっともうちょっと関連したご意見
をいただきたいなというふうに思うんですけど、一問一答じゃなくて、ある種、ちょっと
議論詰めたなっていうところなんですよ。

いかがですか。関連して。

ちょっと僕、泉川委員にお伺いしたいんですけど、いいものを作っても価格でないって
いう局面、具体的に何か、もし例示があれば、お願いしたいんですけど、何かありますか。

すごい良いものを作ったんだけどってロットがないからなかなか売れないよみたいな
のがあったよとかそういう。

(泉川道子委員)

コスパていうか、結局それは慣行の方でも有機の方でもそんなに変わらないと私は思う
んですけど。

労力に対して、それだけの時間や労力をかけただけの価格を乗せるってことはまず農
業者には無理な話であって、やっぱり社会的に日本の国が食べるもの、自分の口の中に入
れるものに対する価値を高めてこなかったっていう、平成の時代の反省に立って私たち
は考えなきゃいけないんじゃないかなというふうに思うので、具体的になって、先生すいま
せん、私からすると全部かなみたいな。

(野中章久委員長)

すいません、よくわかりました。そうですね、全般的に、だってこんなに苦労してい
るのにこの報酬なのっていう正直なところっていうのは農業全般で感じると思いますの

でそういう話である。

逆に言うと、確かに今出ている議論ではそうですね。ロットが大きくなってくつていうのは、ちょっと大仰に言うと、戦後ずっと農業の産物を工業産物みたいにして供給せよっていう政策がずっと続いてきたからこそ、中央卸売市場体系ができたわけで、その中で、大ロットでドカンとシェアが高くなれば、それだけ優先的に価格がつけられるみたいな世界があるので、小ロットでしか出せないとか、或いはもうものすごくローカルに作ってるところの、もう競りにかけてもものすごく値段が安くなっちゃうみたいなのはずっと弊害として言われてるところなので、そういうところの要するにでっかくロットを出すところと、そうは言っても伊賀の特徴からすると、ていうか地産地消進めるんだったら、ローカルに作んなきゃいけないのにローカル作る術が提示されてないじゃないかっていうところの矛盾かなというふうに感じますけども、この辺に関して、もうちょっと同様のご意見ありましたら伺いたいところなんですけども。

品目別をお願いします。

(中井奈緒美委員)

すいません、瑞雲ファーム代表中井奈緒美です。

ちょっと論点ずれるかもしれないんですけども、私アスパラを栽培してまして、春どりアスパラっていうのは全国的にも伊賀の中でも、春のアスパラっていうのは、高単価がつく野菜なんですけども。その中で、ここ最近で言うといろんな業者から、いろんな資材が30%上げあがります40%上がりますって連絡がパンとくる中で、ごめんなさいちょっとお名前を出すと、申し訳ないかもしれないんですけど、私が10年前に始めたJAさんに下ろす値段よりも、10年前よりももう今下がっていたっていう値段、100グラムの単価が下がっていたというのが現状でした。この春ですね。

それはちょっと、JAの営農指導員の方にちょっとそれは抗議させてもらって、お話ししてもらったんですけども、やっぱり価値ある野菜であったりとか、価値ある季節のもの、そして伊賀のもの、そしてそれをPRはしてくださってるとは思いますが、やっぱりそれはそれなりの値段をつけて欲しいっていう、現場の気持ちです。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。貴重なご意見。論点ずれてないです。欲しい意見。

お願いします。

(前川良文委員)

私の方はロットの話なんですけども、農福連携で、障がい者の就労支援の施設で農産物を栽培する、にんにくであったり葉物野菜であったり、結構いいものがたくさんできてる。そういう事業所もある。ですけども、その事業所の生産量が少なくて、ロットが少なくて、買ってもらえない。そういう点が、かなり皆さん方の悩みになっております。

いいものを作っても、障がい者の就労Bの施設でこんなもの作って出荷しますよという、地産地消の直売所へ出したら、結構売れて喜んでるんですけども、それはあんまり量

がはけない。ちょうどね、ロットが多すぎても少な過ぎでもだめなことが多いです。価格にも、反映されない。

お情け頂戴で、例えば障がい者の方が作っているの、ちょっと高く買い上げてあげるわっていうふうな、そういうふうなところがあるんですけども、そういうところは結構ね、長続きしないことが多いです。

だから、もうB型支援事業所で栽培してるんじゃないというのを前面に出さずに、商品で価格を決めてもらうようなね、そういう方向に、農福連携の中ではなっけてきております。そういうことです。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。やっぱりロットって規定性が強いっていうお話だと思いますよね。

なんか、何かってか、非常にこの辺、打開策がね、まだ出てないところはあると思うんですけど。1つは直売所なんかの活用だと思うんですけども、あとは方針としては出てるのは消費者教育、最初に発言ありましたけども、消費者の方の教育。普及というか、教育っていうか、要するに真っ当な仕事に真っ当な報酬は払わないといなくなっちゃうよっていうようなところをですね、わかってもらおうように努力していかなきゃいけないっていうところがあると思う。

それで、消費者教育だと思うんですけども。そこがちゃんと盛り込めてるかなっていうところがあるんですけど、その辺の観点も含めていかがですか、それぞれのお立場でいいんですけど。お願いします。

(中林有美委員)

伊賀牛の生産者中林といいます。

今の皆さんのお話を聞いてたら、肥育牛って本当にありがたいなって思うんです。伊賀牛の生産者、何件かいるんですけど、そのお肉を扱ってくれる人っていうのは、やっぱりこの伊賀地域のお肉屋さんなんですよ。

伊賀肉の業者になられている方がそれを買って上げていただくっていうのが昔からできていて、さらにはその、精肉店さんがそれぞれお客さんを持っていただいているので、本当にこの伊賀地域で昔から地産地消は成り立っている業種っていうのが実感です。

ただその上で、やっぱり生産者、消費者、それぞれ痛み分けっていうか、できる努力をしながら昔から生産を続けてきたっていうところがあるんですね。

今問題になっているのは、やっぱりその消費者も高いものは買えない。もともと、生活の中にあるお肉なので、やっぱり高いものはちょっと買えない。で、お肉屋さんも高くすると売れないっていう現状があるので、そこが今ちょっと難しいなっていうふうになってます。

だからそこ、いいものを作る。いっぱい作って欲しい。でも売れない。じゃあどうしたらいいかっていうのを、生産者と小売店さんの意見も汲んで、何かいい方向に行けたらいい

いなくて思ってます。現状です。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。いや、さっきから牛牛言ってるのは、いや実は僕、すごくて、ローカルにブランド確立して、経済うまく回している例だと思っているんですよ。どうやってるのかなってところがすごい興味あるんですけど。

今すごく、興味を持ったっていうか、大事な話がでたのは、業者さんとの信頼関係で、要するに消費者とね、繋がりが確保されてんだけど、一方ではどうしても今、景気悪いですからね、消費者さんが買えないっていうときにどうしたらいいかって話が出てるといって、課題だということなんですけど、方向的にはなんかありますか。

例えば僕なんかは経済やよく、例えばね、僕の研究室にコンサルって頼まれたら、もう大体定番が、贈答品でガッツと載せて、地元の人にはもっと食べましようみたいな方向性をね、書くのがある種の定番なんですけども。やっぱりそういうふうに、例えば贈答品とか、極端に値が出るやつをどんどん捕捉して、地元の人には手ごろなっていうふうに行くとかって方針が、何となく見えてるのか、いやいやそうじゃなくてやっぱり地元の人にも良いお肉を食べてもらう方向に行こうねっていう方向でいくのかってちょっとその辺ぜひ教えて欲しいんですけど。まだそういう議論になってないのかもしれないんですけど。

(中林有美委員)

その辺は生産者の領分ではなくて、やっぱりこの小売店さんそれぞれの販売方法っていうんですかね。例えば、個人客が多い方とか卸が多い方、遠方に出してらっしゃる方とか本当にいろいろいるので、その精肉店さんとか業者さんによって変わっているっていうのが、私たちから見た見方です。

その上で、この方はこういう牛を欲しがるとか。何ていうんですかね。具体的に言うと、大きい牛がいいですとか、ロスがない牛がいいですとか、やっぱりその違うんですよ。そこに、うまいこと当て込むような販売方法をうちは取ってます。

やっぱりこう、買ってくださる方が喜んでくれるものを作ったら、ちょっと単価を上げていただけたとか、そうですね。その使い分けでもないですけど。そこが生産者の努力かなとは思ってます。

なかなかいろいろ難しいですけど。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。大変勉強になります。

小ロットでやるっていうところでうまくしかも回すっていうコツとか秘訣は、業者さんがやっぱりバリエーションがいて、きっちりそれぞれの同じような業者じゃなくて多様な業者さんがいてっていうのが、支えてるんだなっていうことですよ。

なんかその地産地消のあり方の1つ、なんかちょっとモデルなのかなっていう感じでしたけど。

ありがとうございます。

(川瀬成清委員)

そこで補足なんですけど。37ページの(4)のところで、伊賀牛のところが、直接値段交渉することができるよってというのがメリットで書かれてるんですけども、今中林さんが言われた、どんなものが欲しいかっていうのが常にこう交渉できるっていうのと、あとご自分の育てた牛がどんなもんやったかというのもすぐ見れるわけなので、技術向上にも繋がっていくというのがございますんで。

この、直接値段交渉することできますっていうふうなことだけでは済まして欲しくないなというふうに思います。

(野中章久委員長)

ですよ、今の話からするとそうですね。

要するに、それも何ていうか、状況としては日本全国、もうここ、イオンの方いらっしやらなかったですよ。流通、イオンだけじゃなくてすごく流通が大手になっちゃって、もう売るっていうことは価格交渉っていうところとか納期とかっていうところに集中してきてしまっているところがあるんですけども。

やっぱり伊賀牛をモデル例とすると、やっぱりその多様な業者さんがいてそれぞれと深い関係があって、要するに人間的なね、関係があって、日常的には、そこでいろんな情報もいただけるし、こっちの事情もわかってるし、それもバリエーションがあるので、要するに贈答に強い人、地元で強い人とか、大きい牛が欲しい人、こういうのが欲しい人っていうフィードバックが多いってところが、やっぱり胆。

これで小ロットで動かしていくということですよ。だからそこはぜひ、そういう話。他の品目にもやっぱり、その辺を参考にしていくっていうのが、ある種、地産地消のモデルっていうか求める姿なのかなというふうにちょっと思います。ちょっとというか大分思いますね。

ほか、ぜひ伺いたいんですけども、流通の方でいくと、生協さんどうですかね、そういう意味では、生協さんはロットが大きい方ですけども、取り組みとしてはね、小ロットのものの取り組みは非常に積極的にやっていたらいいので。

(桃木弘美委員)

はい。先ほど皆さんがおっしゃったような消費者への教育っていうところはまさにうちの役割かなあというところも感じております。

やはり地産地消、私たちもいろんな農家さんと産消提携を結ばせていただいて、地元のもの、三重県のをしっかり消費していきましょうという取り組みもしております。

今、とにかく私たちが手にする商品、いろんな農産物とか、畜産物、生産物がどういう思いで作られてるのかっていうのも組合に知らせていくことであるとか、実際私たちもそっちへ出向いて行って生産者の方と交流をしておりますし、組合員自身も、産地交流という形で積極的に参加してもらって、その商品が持つストーリーをしっかりと知ってもらうってことをやっぱり大事にして、そうすると、やっぱり消費者として、同じ選

ぶならこちらを選ぼうかとか、例えば地元の方に食べるってことはやっぱり物流コストもそれだけ抑えられますし、環境にもやさしいということで、私ども国名だけではないですけども、エシカル消費っていうのをすごくやっぱり組合員に向けては、進めるようにしています。

やっぱり国産のものを食べるとか、自分たちの商品が誰かの笑顔になる、繋がるというか、そういうふうな消費を進めてやっていきたいと思いますということで、そういう組合員に向けてしっかり、教育っていうとあれですけどお知らせをして、同じ選ぶならそういうものを選びましょうという形で、取り組んでるところがあります。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。やっぱりでもあれですよ、ロットが小さいっていうことであつてもちゃんと流通できるようっていう、エシカルなものっていうのもそうですし、やっぱり地産地消というところ。

ちょっとそこでお伺いしたいのが、お店だとね、最近のトレンドだと地元の人がポコポコっと小ロットで置くコーナー、スーパーなんかもそうですけど、置きやすいんですけど、コープ三重さん結構配達の部分が多いと思うんですけど、そういうあたりでそういった小ロットへの対応みたいのっていうのは、やっぱり難しいものなんですか。

(桃木弘美委員)

そうですね。小ロット。そうですね、うちはその愛知、岐阜、三重3件で商品を仕入れてるという関係もあるんですけど、ただ、例えば1つの小松菜であつてもいろんな農家さんと提携を組んで、うちの基準に合った形で作っていただいて、そういう農家さんを幾つも契約してお届けしてるっていうのがあるので。1つの農家さんだけで、その小松菜を賄つてると、そういうことでもないです。

ただ、本当に規模の小さい小ロットっていうことであれば、やっぱり店舗の方がそういう形の農家さんと本当にもう地元の農家さんと契約をして商品を仕入れてるっていう形になります。

(野中章久委員長)

なるほど、ありがとうございます。ちょっとくどいですが、加工なんかでね、やっぱりちょっとロットが小さいところの業者さんとかも結構あるかと思うんですけども、例えば、すいませんね僕、生協の研究もしてたので、東北の生協連でいくとね、例えば味噌の製品を作つて、次、最後こっちにこう塩麴があつてこっちに大豆蒸かしたのがあつて、最後まぜてこうやって付け込むと、味噌がスタートしますよっていう商品を作つて、ある種の消費者教育の一環として、商品としても供給してたりするんですけど、正直買う組合数ってのはそんなにないんですが、そういうのはちょっと商品供給と一線を画したところで、何かのそういった活動するみたいなところっていうのは、結構多かたりするんでしょうか。

(桃木弘美委員)

そうですね、実際お味噌もうちは、時期になったら麴と大豆の企画があるんですけども、本当にこだわりもっておられる方は必ずそれを待って買われますし、あとうち各、三重県内のセンターとか味噌づくりっていう、地元の例えばそういうお店屋さんに来ていただいてお味噌づくりを教えてもらうとか、そういうのはちょっとすごくやっぱり人気で、本当にもう定員よりもオーバーするぐらいの申し込みがあって、やっぱり自分でそういうお味噌を作ってみたいって思われる方とか結構いらっしゃるので、そういうのがあれば、本当に直接生産者さんとの交流もできますし、いろんな話を聞くことで皆さん関心を持っていただいていますね。

(野中章久委員長)

なるほど。ありがとうございます。

商品供給のところ、地域連合で供給してる部分だとやっぱりどうしてもロットが必要ということになるということでしょうけれども、ある種、組合活動っていうのがやっぱり生協の特徴で、その組合活動の中で、例えば商品紹介するとか、例えばみんなで商品研究といいますかね、野菜ってのはこうなんだよみたいな余地は非常にあるというところは非常に、何ていうか今日の話、議論してる場所には合致するところかなっていうふうに感じました。ありがとうございます。

ほか、いかがですかこの辺の所、お願いします。

(松森芳子委員)

生協さんの小ロットの件でいいますと、うち 10 年ほど前に 6 次産業の認定を受けて、伊賀米から、伊賀米の生産からお菓子づくり、販売までを手がけさせてもらってるんですけど、何せ半家族経営みたいなのところがあって、うちも生協さんとかに出して販路拡大したいっていう思いは昔からずっとあったんですけど。規模もそんなに大きくないので、そういうところにはなかなか手が出せなくて、どちらかというと、地元のお店ですとか、今できた万川集海さんとか伊賀百貨さんとかああいうところで他県の方に少しでも目につくようにっていうふうに出荷させてもらっているんですけど。

そういう小ロットでも取り扱いしていただける、そういう業者さんとか、そういうのがあればもっと販路が広がって行って、私たちもやりがいが出るのかなっていうふうにはずっと思っているんですけど。

6 次産業の認定を受けて、補助金をいただいてさせていただくのは本当にありがたかったんですけど、何せ書類を出して結果報告を出して、それにすごく手が取られて、なかなかそういうところまで手が回らないことが多いので、そういうところも含めて、もうちょっとこう、いろんなところで小さな企業でもやっていけるようなことができるのが来たらなっていうふうには、常に思ってるんです。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。だから、直球ストレイクな話ですよ。

ちなみに書類大変っていうのも、あれ、この会議で出たと思うんですけど、AI とかで

書けるようになるんじゃないのみたいな話が、やっぱりちょっとあって。やっぱりその辺も積極的に今後支援するところがあるんじゃないかなというふうに思うんですけど。

小ロットはやっぱりいいです。必要ですよってという話で。大事。その具体的な政策に落とし込むときに、これ基本計画なんで、理念から計画で具体的に何やるかっていうのは下の階層なので、予算の話もついてくるから、結局その年の議会とかも通過してくことになるかと思うので、この中に、具体的にこの予算幾らつけてってことには当然ならないんですが、やっぱりこういう議論を積み重ねて、小ロットのところからスタートさせる、そういう仕組みをつくらうよと。

それ夢広がりますよねってという話で、そういうところの議論が積み重なっていると、結局具体的にこれやろうねって書いてなくても、その基本計画の中で読み取れるような基本計画になると思うので、非常に重要な議論だと思います。ありがとうございます。

お願いします。

(泉川道子委員)

うちの子、高校3年生なんですけど、小学校のときに伊賀牛の給食が出たんですよ。それで栄養士さんが給食だよりに、何月何日の給食は伊賀牛で、自分たちの土地で育てた牛の肉ですって書いてくださって。何ていうんでしょう、そういうやっぱり自分たちが食べるものがどこから来てるのかっていうことを、単発でっていうよりはもう少し意識を全体で上げていくような地域づくりにリンクしていけたら、この農業だけじゃなくて観光だったり移住だったり子育てだったり、あとは土地の質って言ったら変ですかね。伊賀市で住むことのやっぱり喜びだったりに何かこう時間をかけて、そういう方向にいったらいいんじゃないかなっていうふうに思って、割と私はその子どもの給食ってみんなで取り組んだら、やっぱり、次世代を育てるっていう意味でもしっかり税金をかけて担保していくっていうか保障してあげてっていうのが、そのロールモデルになっていったらいいんじゃないかって。

これ今の市長じゃなくて前の市長のときに、オーガニック給食のお話ちょっとだけさせていただいたら、そんなこと言ってもあなた、ロットでそんな準備できるんですかと言われて、次の言葉が出なかったんですけど。

何とかできたらすてきななって思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。ちょっと乗っかって、私見を述べさせていただければ、給食売る際って言い方は変だけど、厳しいですよ。

このサイズとか加工する、要するに時間内に加工しなきゃいけないから、このサイズこの枚数育てなきゃっていうんですけど、地産地消を進めるためにはある種、調理するところからが生徒が関わるとかね、見るとかいうところもあってしかるべきだし、とすると、全校一斉に、はい今日地元のっていうんじゃないで、何回かに分けてっていう調理実習的なものに合わせてっていうのも、僕はスタート時点ではぜひ必要かなと思うん

ですよっていうところですね。

だって要はですね、ちょっと他の事項にも関わって、実は打ち合わせ先週やったんですよ。僕、なんていうか、行き当たりばったりでここ来て皆さんと楽しくお話してるような体ですけど、一応打ち合わせやったんですけど。その時にちょっと僕が強調したのは、地域の中で自給しましょうよと。だから、自給農家を、自給生産を大事に位置付けていきましょうっていう話をしてるんですよ。

だから、自分で作って食べるってのも大事で、それを何とか、そこからもしかしたら自分で食べてるだけじゃなくて、もうちょっと売れるぐらいつくろうよっていう人が出てくるかもしれない。これ新規就農の1つのステップとしてあるんですけど。もう1つは、地域内にいる人が地域のものを食べると。だって、伊賀市で作ってるものは伊賀市でみんな食べてる方がいいじゃないですか。

ちょっと失笑かったんですけど、油もこないし、その労働力もないんで。何ていうの世界なんていうかな、映画のマッドマックスみたいな世界になっちゃってるから、伊賀市だけでみんなまで守ってこうよっていったら、なんか何言ってんだこの人って感じになったんですけど。でも、それにちょっと近い話で、地域でみんなで作って、みんなで食べてわけ分け合うってところを作っていくとコミュニティも活性化するし、経済も活性化するし、稼いだものを、お金をね、他の土地から来る、要するに端的に言うと新潟コシヒカリばんばん喜んで買っていると、せっかく稼いだのにお金出っちゃうわけですよ。それ伊賀米食べていけばお互いに、今の経済も太るわけですよ。

だからその観点を考えると、自給するっていうのがキーワードで、自給するってことはですね、自分で作るんですよ。お漬物もね、作る方法も考えていかなきゃいけないし、うちの学生に調理させると結構びっくりするのがあるんですけど、それさせるとかね。僕千葉出身なんで、学生にいわしちょっと捌いてみるとやらしたりするんですけど、大概できないんですけどね。

今日は農業なのであれなんですけども、それに類する作り方とか、やっぱり漬物もどんどん大事にしてかなきゃいけないわけですし、松阪の赤菜みたいなね、一旦すたれちゃったけど復活するみたいな動きが今後どんどん必要なことになってきますから。だからそういうところを考えると、やっぱり、小ロットでも始めていくっていうのが、とっても大事なところじゃないかなって思うんですよ。

同時に思うのは、ぜひ僕の考えであれなんですけど、恐縮なんですけど、お金目としては、地域はね、経済を回さなきゃいけないんですけど。同時に、これ経済学的に言うと市場というやつなんですけど、同時にこの市場ってやつが結構曲者で、必ずしもね、人類に対してねよくないんですよ。

言ったように、ロットそろえられて、元手がいっぱいあってドカンとつくるぜって人にとっては、より豊かになるすばらしい仕組みなんだけど、いやちょっとそうじゃなくて、そこまで持ってないけど生き残るためにちょっと何かやりたいんだって人にな

とっては冷たいですよ。

超ロットじゃないと市場が、要するに相手してくれないとか、埋もれちゃうとか、認知度がないとか、あの消費者が買うよって言うてくれないとかっていうことで。そうすると分け合うってというのが大事だということ。

例えば前回は実はちょっと言ったんですけど、米を考えると、白米で流通してる部分と玄米で流通してる部分があるんですね。地元では当然玄米でやりとりしますから、もらったりしてね。これをもっと広げてもいいかなっていうふうに思うんですよ。だからどっかで地域の人に玄米で供給する仕組みを作るとか、結果として伊賀米を食べてもらうとか、実は玄米で、非農家とか、その地域の人だけじゃなく農家組合とか営農組織に関係ない人で、外にいる人も、例えば2年契約とかでその間ずっと玄米で買えますみたいなことをするときですね、実は農協の仮渡金みたいな値段よりも高い値段がつけられて、みんながいい経済になるとかですね、それを農協が仲立ちすればですね、都会で売るよりも、実は流通コストも削減できるとかですね、そういったところも含めて、地域内で農産物を分け合うとか、第2の市場みたいなね、プロパーの市場じゃなくて、ちょっと伊賀流の市場みたいな形で流通させるっていう工夫をしてくってというのが、とっても大事なんじゃないかなと思っています。

今日はちょっと、ロットの話で議論して結構いい意見が出てるのは、やっぱりその辺の小ロットから始めるってところも伊賀流の第2の市場みたいの、そういうところで組み立てていくべきだっていうところに、収斂するんじゃないかなと思いますけども。

そうじゃねえぞって人が、ぜひ、どうぞ。

(村山邦彦委員)

今先生おっしゃってた基本的な概念としても非常に賛同するところなんですけども、やっぱり新規就農とか支援とかもあって、やっぱり始める人ってあんまりお金のかからない野菜とかから始める人が多いと思うんですけど。

青果ってこの地産地消の小ロットってめちゃめちゃ難しいんですよ。特に伊賀市の場合は、その昔は市場がね、公設があったんですけど、それがなくなってる状態で青果をマッチしてちゃんとやるっていうの、松森さんなんかもね、そこらじゅうの小売店も全部回られているんですけど、あれ加工品だからできる話で、青果で今先生がおっしゃってるようなローカルで回す仕組みを作ろうとすると結構工夫が必要で、おそらく八百屋さん、松裏さんは八百屋さんされてるからよくわかると思うんですけど、もうその間に合わないもので合わせようと思うと絶対市場に調達なっちゃうんですよ。

それを地域でやるような工夫をやるっていうのちょっとこの文言の中に何か入ってくるとすごく嬉しいなとか、勇気がでるような感じが、農協さんもね含めて、給食とか農協さん経由でいくと思うんですけど、野菜作る人も結構高齢化してきてるんで、なかなか確保するのが難しい中で、こういうものをみんなで作りましょうみたいな何かそれっぽい文言がもうちょっと入ると嬉しいなっていうのをちょっと思いました。

(野中章久委員長)

僕もそう思います。

どうぞ。

(松裏充彦委員長)

すいません。今八百屋やってる松裏です。いちご作っております。

おっしゃってくれてるように、今公設の市場が伊賀にはほぼ機能してない状態です。うちに八百屋が市場やったらいいやんとかいう話も出てるそんな簡単なもんじゃないっていう話も言わせてもらって。

以前にもちょっと違う会合では言わせてもらったんですけども、生産者、平たく言えばですけど、生産者の方が物の担保をしていただいて、JAさんなり市場なり私ども八百屋なりが、その品質の担保をした状態で、さっきの話でいくと、学校給食に持っていくという状態が通常なんですけれども。

そこで、今学校給食と一緒にあって卸せたらなっていう思いも、実は私、JAさんもお話を私どもはちょっと思っていて、直接伊賀の生産者の方はうちに持ち込んで、契約ではないんですけども、必要な分だけ発注させていただいて、いついつに納品してくださいってことも、実際させてもらってる業者さんもあります。

なので、もっと上手に在庫見込みとか何かシステムができれば、伊賀内で回せていけて、うちらもよその市場から綺麗なものも入ってくるし、値段も安いのは入ってくるんですけども。それだけでもいかないのかなっていうのは今、お話聞かせてもらって思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。やっぱり100%自給は無理なので、やっぱりちょっと、ある程度の外部との連携ってのが必要なのかなと思いますけど。

かつてはね、市内に市場があったときは調整、それを調整するのが市場ですから、言い方変えるとね、僕ねあれもやってるんですよ、松阪の地方卸売市場のなんか運営どうするかみたいなやってて、あまり言っちゃいけないのかもしれないですけど、毎年取扱量が減ってて、中央卸売市場が卸してから、ちょっといろいろシュリンクして、何とかかなりますかっつたらシュリンクしっ放しだねみたいな話なんですよ。

だから、どうしたらいいんですかね野中さんっていうこう言われて、いや、大変申し訳ないんですけど、ここでもなんかちょっと失笑買ったんですけど、メダカの市やりましようみたいなことあそこでも言ったんですけど、言い方変えるとイベントとか、あと商品開発とかではあっちでもやっぱり同じように、何ていうかな、中央卸売市場とか、そういう都会に付属する地方市場っていうふうにすると先細りだから、地域の中だけで回るような仕組みを考えていかないと多分起死回生の市ってでないよねっていう話をしているんですけど。

やっぱりその辺で向こうも困ってるんで、ある種やっぱり領域を広げて少なくともこ

の近辺のところで協力して、足りない、伊賀で作った野菜を消費するんだけど足りない分は近隣から出してとかいうふうに、かつてあった中央卸売市場体系に変わる、もっと極めてローカルな調整機能を持った野菜の流通体系ができるとお答えになるんだらうなって。申し訳ありません、僕専門の割にそこ答え出てませんので。試行錯誤だと思うんですね。

ただ、明るい兆しは、やっぱり計算技術上がってるんで、かつては例えば1週間先に出荷量このぐらいですよって予測するのがものすごく難しかったんですけど、今はかなり正確に、例えば1週間ぐらいだと、天候も含めてこのぐらいの予測だよっていうのが出るんで、そういう意味では、近隣のそういう流通、小ロットの流通をつかさどるところが連携すると、そういった計算技術を応用するとですね、極めてローカルでしかも効率的な流通ができる型っていう、まだ、無責任なあれですけども、計算技術でする可能性が出てきてますねっていうところはあるので、おっしゃる通りぜひ、そういった小ロットの野菜流通をですね、こう後押ししてくんだっていうのが、文言書き込まれてると僕もいいのかなと思いましたよ。

全体のご意見としてもそっちの方にあるんじゃないかなというふうに思います。どうですか、そんな感じで。もう一言あるぞっていう方、ぜひご発言いただきたいなというふうに思うんですけど。

お願いします。

(福地和幸委員)

失礼します。米生産農家の福地です。

先ほどからですね、皆さんがまず小ロットからのというふうな取り扱いであったりとか、消費者に対する理解をどういうふうに進めるかっていうふうな話を聞かせていただいておって、私の今のですね経営状況からすると、小ロット対応しかできないというふうな恥ずかしい状況なんです。

子どもと2人で10ヘクタールの米を生産しておりますけれども、地元伊賀で言えばですね、お店で取り扱いをしていただいているところはほぼゼロに近いんです。

なぜかって申し上げますと、私は実際自分で営業に歩いてですね、やってるっていうんじゃないくて、今伊賀市内で、私のお米をチョイスしていただいている皆様っていうのは、すべて口コミで、個人の口伝えで広がってっております。おかげさまで。

もともと私の立ち上がりがですね、関東とそれから四国を中心にやっております、10ヘクタールは今になってやっと10ヘクタールですから、以前は5ヘクタール、6ヘクタールということで、小ロット、いろんなところに出しますから小ロットでしか対応ができない、もっともって実は求められるんですけども。私と子どもが2人でやっているながら、今の経営方針からいくと、どうしても生産性を上げるとかですね、面積を増える、生産性を上げるというのは少し可能だとは思いますが、規模を広げるということについてはちょっと無理かなっていうふうに考えております。

あとは皆さんがおっしゃっていたような、もう少し広げたいとかというふうな考え方

実はあるんですけども、ネット販売をやらないかとか、海外輸出しないかっていう話も実はもう10何年前からもいただいていたんですけども、私は一番自分の販売するポリシーとして、お客さんの顔が見える、直接話がしたい、そういうところで私が勉強する。消費者の皆さんも私に対する質問ができたりとか、私もその質問に答えながら、じゃあどうしてこう、じゃあこういうふうな方法をやってますよとかっていうコメントを返せるっていうふうなコミュニケーションをまず第一に考えてた。

そこから派生した中で、お店の方も実は東京都内、23区内にもできましたし、千葉県にも派生してます。ありがたいことですので口コミです。

大きくもしたいとは考えるんですけども、やっぱりクオリティの問題であつたりとかっていうふうなところで、あまり手を広げ過ぎてですね、品質を私は落とすということのを良しとしない経営方針を持っていますので、小ロット対応もう大賛成なんですね、私個人的な言い方で非常に申し訳ないんですけども。

ただ、小ロットだから伊賀市内での地産地消に協力しないとできないとかっていうそういうふうなマイナス手法ではなくてですね。量的なものは、その程度に限られるとは思うんですけども、実は生産者としてのやるべき姿というのは、効率化であつたり、さっきのお話の中にもありましたように、これからの若者、就農をするであろう若者に対してのですね、アクションを絶え間なく考えていく。それは、私ども生産者だけではなくてですね、もちろんJAさん、土地改良区もあつたり、もっと申し上げると行政サイドの中でのですね、例えば農業関係の繋がりを持っていただく、情報共有をしていただく、そういうふうなこともですね、若者に対する情報の発信、彼らの彼女らの不安材料の払拭というふうにも繋がると思っていますので。

今のところですね、私の地域の経営状態と地域の諸問題を考え合わせた中で申し上げると、非常に身勝手な物の言い方で恐縮なんですけれども、小ロットで大賛成であり、小ロットで参加させていただくというふうなことで、協力をしていきたいというふうには考えてます。

価格面ですとね、実は10何年、米の価格を上げてこなかったの、消費者の側から米上げろって言って逆に怒られてたんです。米上げろって言って、申し訳ないちょっと上げますって言ってあげたら、今年JAさんの小売価格、買取価格よりまだ安かったという、そういうふうなことでまたおしかりを受けたというふうな。

ただそれで、じゃあお前やっつけていけるんならいいじゃないかっていう話なんですけれども、これだけ一昨年からですね、いろんなものが、2%、3%ではなくて、何十%というふうになってます。

そんな中で、それを飲み込めるほど消化してしまえるほどの規模じゃないので、ダイレクトにもう価格に跳ね返せたりすればいいんですけども。もう自分たちの給料を削減するしかないっていうふうな方法で、今のところは耐え忍んでるっていうふうな状況です。

今皆様方おっしゃってきたような、やっぱり大きくもしたい、効率化も図りたいっていうのは私も同じなんですけれども、まずはさきの委員会でもお話しさせていただいたかと思うんですが、生産する方、消費する方だけでなくって、販売する方、イベントを開催していただく方々、皆さんが1つになるという中で、せっかくこの委員会が立ち上がってるわけですから。これを機会に、少しずつみんなが横串を通してですね、どうやっていこう、こうやっていこうというのを、この委員会の策定委員会が終わったから今年が終わりっていう話ではなくてですね、皆様方もおっしゃっていただいたように、継続的に予算化する、或いは手助けする、何かアクションを起こすとかっていうふうなことがですね、せっかく10年という計画の中で、今皆様方が一生懸命考えられてるところがですね、一番のポイントかなというふうに考えてます。

ですから、これが終わる12月がごくろうさん会でしたではなくって、これを機会にですね、来年度からそれぞれができるものは何なのか、何が生産者としてできるんだろうかというふうなアクションも含めて、進めていけたらいいなと思います。

ちょっと長くなって話がバラバラになりましたけど、小ロット賛成の根本的な意見でした。申し訳ございません。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。いや助かりました。

要は、外で売るっていう観点はちょっとあまり僕の方も言わなかったんであれなんですけども、要は閉じ込める話じゃないんで、売れば売れる限り可能な限り、要するに外で稼いでくるっていうのは、経済行為の基本なので、そこに至るステップですよ。少し小さいところから始めてって、伊賀の世界を作って、1つは観光なんかも含めてそうなんですけど。伊賀に呼び込む材料になるじゃないですか。

何か非常にローカルな漬物がいっぱいあるぞとか、非常にローカルな食文化が残ってるぞというのを、やっぱり未来にわたって保持することになりますし、それはブランドになると、いや、伊賀のものって、ちょっと昔の日本があるぞみたいなことで売れるようになれば、外行って稼げるわけですから。そういった、ある種だからさっき言ったように白米と玄米みたいな世界で、外で、プロパーの市場で稼ぐっていう行為と、第2の伊賀流の第2市場みたいなところで、上手く地元でこう、何て言うかな、発向を手助けしていくとか、そこでまわしていくとか、みんなで豊かになる方法を考えようとか、その外側に同じようなことを考えてる周辺の松阪なり津なりと連携して、そこでお互い調整していくっていうところがないと、当然その孤立して、柴作って立て籠もるわけじゃないですから、そういうふうな作り方を、作り込みをしてくってということが、ある種この局面での夢のある農業へのステップなのではないかなっていうところが、今日何か皆さんが一致しているところだと思うんですよ。

まあそういうふうには考えないと、例えばだから、今日最初にそれぞれの立場で言ってねって話でいくと、農協さんからするといやいやちょっと待ってくれと、外出て稼がない

と我々の販売手数料取れないんだよって話に当然なりますから。そこはそれでガンガンやってもらい、資材でいくと、石油情勢かなり悪いですから、どんどん上がりますから。そこは逆に言うと、もう全国で系統で結集して、それこそ農協の貿易会社使ってますね、原油を調達するみたいな、そこまで頑張ってくださいとかっていうのも当然期待される場所ですから、その世界に渡るところと内側についていうところで組み合わせていくっていうのが例なのかなって感じ、結論ではないかなって。

そこでいくと、ちょっとこの計画案に対してはぜひローカルにね、流通が回すそれを支援していくところを、何か控えて欲しいってところがあるぜってところがある、とりあえずここ、今進んだ議論ではないかなというふうに思います。

なんかすごく、白熱しました。いかがですか。所長。

(山田長生委員)

卸売市場っていうか、卸売市場自体も最近はその効率化をとるので、運営をいろいろ任されるっていうか、それに数値目標みたいなも課されてるっていう状況です。

たださっき言われたみたいに、小ロット、地産地消という意味での仕組みっていうのは、今運営してる中ではそういう発想っていうのはないという状況もあると思うので、そこは1度その生産者と話し合いの場を持って、卸売市場としてもこれからどうしてこうっていう課題もあるので、その間でそういう道筋を見つけるっていうのも、1つの方法かなと思いました。今私が具体的にどうしたらいいっていうのはないんですけども。

それから教育の関係なんですけれども、教育は、防災や食育などいろんなところで入ってくるし、いろんな面でもあるんですけども、効果が現れるまでに時間が相当かかってしまう。小学生で教育を受けて、成長するまでに大体10年、15年かかってしまうので。ただ、私としては一番効果があるっていうか、成果を伴うのは教育かなと思っています。

全ての子どもが、そこに興味を持つとは限らないかもしれませんが、その中には必ず興味を持つ子どもが増えるのは確かだと思いますので、それは進めるべきだと思います。時間がかかってしまうという点では、今のサプライチェーンと両輪で進めていけば、最終的には15年、10年たった間には、おそらくそれに関わる成長した大人も増えてくるだろうし、そのときには市場が、一段階ステップアップするということも考えられると思うので、非常に私も賛成っていうか、ぜひ進めていくべきかと思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。時間かかるってところはずっとそうなんですけどね。

逆に言うとね、さっきのね、やっぱり伊賀牛の話、僕非常に感銘を受けたのは、やっぱりお客さんからのフィードバックで、生産者もいろいろこう、大きい牛が良いのかってやって努力するという話があったんですけど、野菜も絶対そうだと思うんですよ。

この中で関東出身は僕だけなのかな。あのね、一言、この辺の小松菜に言いたいことなんですよ。あのね、小松菜って東京の小松川で作ってたローカル野菜なんですよね。あの辺なんですよ江戸川のそばだから、千葉側ですけども、もっとちっちゃいんですよ。ごつ

いんです、この辺の小松菜は。小松菜がね、硬くてごついですよ。違うと。もっとちっちゃいうちに取りってくれと。いや、背丈があってももっとひよろっとしているものだよと、いうのがあるんですね。こういう違いが出るんですよ、フィードバックしながら。

それがね、品種までローカルにならなくても、伊賀の人の食文化なんですよ。やっぱりそこがね、ここの人の味覚にあった野菜を作っていくことによって、伊賀のキュウリってさあとかっていうとこにね、長い目で見るとなっていくはずなんですよ。

ていうのを仕掛けていくためにも、やっぱりぜひ八百屋さんみたいな形でね、ローカルで消費者と対面で交流するような仕組みがですね、今から八百屋さん 1,000 件つくれみたいな話は当然ならないんでしょうけど、やっぱりそういうふうなインターフェースがある形ですね、ローカルの食文化が自動的に出てくるような仕組みが出てると、夢があるなというふうに思いました。

大分この話でしたんで、まだご発言いただいてない方にぜひ、ちょっとでもあなた走りすぎだよみたいな話もあれば、というのを今から言うのもちょっと度胸がいるかもしれませんが、ご意見いただきたいと思います。

どうですか。

副委員長、ちょっとあなた走りすぎだよみたいな話も含めて

(森下光子副委員長)

貴重な意見ばかりでありがたいと思います。

先ほどから小ロットの話とかそういう話が出てはいるんですけど、私の身の回りを、近場を見てみると、先ほどの泉川先生の卒業生とか、東京農業大学校とか農業大学校の生徒さんが皆で生協へ協力しながら出しておられるんですが、1人が1つの小松菜、1人が菊名を大量に作ると、虫が発生したときに、一斉にその畑はやられるって聞きました。特に有機栽培なので。だから、そういう人たちの意見を聞くと、あちこちの圃場に違うものを作付して、だめなときには、うちは今年、今月あるよ僕はあるよっていう、詰め合わせをセットにして売っておられるっていうのを聞くんですよ。その代わり、消費者の皆さんは、もう今月は虫にやられたからね、大根しかない。寒かってあかんかったから、菜っ葉物はない。そういうズッキーニやったらズッキーニばかりが来るとか、そういうのがあるんですが、消費者さんと常に対話されてるんで、理解があつていいよって、それを料理の工夫をしたり、毎月1回お便りを出して、私たちの状況は今こうです、価格と状況はこうですが値上げをしません。聞くとびっくりするほど安い単価なんです。でもなんか、もうそばを通るとみんな嬉しそうに楽しそうに農業されてるのがもう、私自身すごく勇気をいただいているところです。

だから、農業にもいろいろのやり方があって、大きな農家がいいのか、そうしてみんな協力し合って、いろんな野菜を詰め合わせて売っているのがいいのか、でもそういう方たちは、消費者さんとの対話をとっても大切にしておられるので、本当に見えた農業をされてると思います。

何がよいとは言いませんが、せっきやくこういういろいろな皆さんがお集まりなので、これを機会にプツツと切れることないように、横の線をしっかり持ってもらって、すべての情報源を共有しながらすると、助け合った農業で何かいい農業が生まれてくれたらいいなと思っております。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。ほかに、まだ発言いただいてない方。

お願いします。

(吉田具示委員)

2回お休みいただきまして、すいませんでした。土地改良区の吉田です。

ちょっと聞き取りにくかったら失礼します。

農業、今までの話ですけれども、農業イコールいわゆる園芸農業ですね、今話主体になっている園芸と、我々土地改良区としての関係で言いますと、今福地さんが行われてる米、米中心で、何をするかっていうと、いわゆる農業用水施設の管理ですよ。この管理を農業者全員で携わってもらっています。

それが今、何が起きているかという、一番最初にも言いましたけれども、やっぱり高齢化でね、減ってきてる。耕作放棄。これはやっぱり地域で農業を守りながら米を作って、各個人が米を作って、そして農協さんにも応援していただきながら販売をしていく。

個人だけの販売というのは、なかなか個人では難しいので、ここに1つ農協さんの、そういう組織として成り立ってるわけですよ。それがあって、今までの兼業農家が続けてきました。

で、今何が起きているかという、前にも言いました、高齢化で兼業で続けていこうというのはできない。なぜか。夢があるということに対して出てますけれども、やはり収入ですよ。初めから出てます、アンケートも一緒です。生活できる、規模にも当然影響するんですけど。これがなくなってきて、続かない。それが今現在、高齢化で後継ぎがない。

何が言いたいかと言いますと、やっぱり個人でやってるのはやっぱり難しい。土地改良区は皆さんの、米を作るための水を守るために、ずっと協力を得て、皆さんがそれぞれやる代わりに、土地改良区で全体の施設を守ってます。

それでずっと今までね、続けてこられたわけですけれども、結局やっぱり夢がないですよ。反対に言うと、夢がないから辞めていくんですよ。高齢化に伴って、親父亡くなった、そんなえらい仕事、儲からない仕事なんでしなあかんねん。これ今までどこでも言われてる話なんですけど、はいこれとちょっと園芸とのポイントとまた違うんですけど。この地域の面積ほとんど水田なんです。水田で、この平場の条件の、今でも条件の良いところはね、後継者もいて、集落営農とか法人化されて、いっぱいされてます。そこはいいんです。それでずっとね、継続できるようにしていけばいいんですが。

ただやっぱり山間地のやっぱり不便なところ、新たに新規就農を求めても、やっぱり儲

かるのと、生活できるのと。でそれだけの条件を作ろうと思ったら個人ではできませんので、だからそこをどうするか、やっぱりその地域の水田の面積をいかにして守るかっていうときに、皆畑作るっていうことはまず不可能ですので、米で生きていく。地域として、連携して生きていく方法が必要なんだろうというふうに思います。

そして今、やっぱり農業ってね、補助いただきながら進めていく。その中で、今の国の体制としては、やはりまず水田の部分に関して言えばね、スマート農業に代表する、やっぱり効率的に単価を、コスト縮減の方向ばかりなんですよね。それができないと、支援はしませんっていう形で、線引くわけじゃないんですけど、ちょっと区画の拡大すればね、他のことも手がけられますよという、はい。

ところが山間地行くと、そんな一丁区画とかね、無理に、無理に山向いてですよ、ああいう山じゃなくて田んぼね、段々のあるの田んぼを無理に平場へ広げて、こうやって効率的にやれっていう条件をつけられる今の体制なんです。

何が言いたいかと言うと、そこでやっぱり国も県もその方向で動いてもらってます。市もその方向で、いわゆるこの事業に対して、いわゆる、機械更新するにしても何かにするにしても、やっぱり大規模化を図らないかん。そして、担い手に集積かけないかん。これも大きな条件になってます。

それができるところは進めてもらっているんですけど、そうでないところっていうのは個人でできないし、地域でも、やっぱりちょっと元気がないんですよね。

真ん中の土地改良区として、山の中の水田の水を守るためにため池と水路、皆さんの力で応援してもらって守っているんですけども。やっぱり高齢化の後続かないんで、非常に頭が痛い。

そこで行政で、やっぱり国県の方針の中で基本は進めていいんですけど、それプラス、市の独自のね、そういう小規模農家をしっかり支えないと、それこそもう、この辺はまだ田んぼ残るかわからんですけど、郡部、いわゆる郡部の農地っていうのはやっぱり廃れていきます。はっきり言いまして。もういっぱいあちこち耕作放棄でできてますんで。これをくい止めようと思うと、やっぱり今からこの計画に基づいてこの10年、10年先ってどうなるかわかりませんが、前の委員会的时候に、地域計画抜けてましたということで、農協さんの方から意見いただいています。

地域計画。作れるところは作る、作ってないところもよくあるみたいですよ。ちょっとこれはやっぱり、何ていうかな、いわゆる農振の振興計画の中の1つのいわゆる水田農業に対する1つの方向づけというのはしていかなあかんと思うんで、はい。

そこをどういう形であらわせるかっていうのが、非常に難しいんですけど、これ非常に大事だと思いますんでその点も含めて、また次回の関係ですけども。文言としては、その分野入れていかなきゃいかなのやろなというふうに思いますんで、よろしく願います。

(野中章久委員長)

よくわかりましたありがとうございます。

米は基幹ですから、特にいや、そのページでいくとね、32ページの10年後の、例えば農業の姿ってことで、そこに関わる場所ですよ。

だから、ちゃんと展望がつか体制が立つようになって。ただ、今回というか前回から議論してるように、ご発言の中からもありましたけど、国と県の事業があつて、予算規模からすると市の事業ということだと、ちょっとサイズは小さくならざるをえないっていうところがあるので、そこで何ができるかっていうのは、この計画の下位階層っていうか、実際にやるときに工夫がいくところですけども。そこは、文言がぜひ入るべきっていうことのご指摘であろうと思います。

今日の議論は、ですから畑のね、小ロットでって話があつたんですけども。当然一方で米は基幹ですから、米どうすんだって話もありますけれども、ちょっと委員長としては地域流通でってところでまたちょっと玄米で出すっていう。

ちょっとまだ我々の議論、学会の議論では少し出てるんですけど、米が全国的にも不安定化するんだったら供給が、要するにね、なんていうの、よく言うんですけどサブスク化。米を。要するに契約しちゃうと。消費者、必ず出してくれと、うちにと。売ってくれとね、1年、1俵かなあ。核家族だと。ぐらいいすかな。もう断るっていうまではずっと更新してそれを買うとね。だからその背景があるから、個人向けの精米機、結構売れてるらしいんですよ。

こないだちょっと僕、今それはちょっと僕調査したんですけど、コイン精米機の台数も増えてるらしいですよ。神奈川とかで。米、あんまりとってないのに。だから明らかにやっぱりサブスクで買っている人が増えているんじゃないか、統計とってないんでわかんないんですけど。

だから例えば、あの地元、伊賀米を伊賀の地域の人がサブスクで買って、その時の売り渡しの金額が、要するに白米の小売りに近い価格をつけられれば、所得が増えるわけですから。しかもそれを農協さんが仲立ちしていただければ、システム化はそんなに難しくなるとか。あと例えばそうやって地域、地元で食べるっていう文化の一部に私はなってるんだって意識があればですね、例えば草刈とか用水管理ってちょっと大変なんですけど、製品には載せませんが、手伝いませんとか、協賛金出していただけませんかみたいな展開もちょっと可能なかなあみたいな方向にはちょっと、いう論者も最近出てき始めてるなというところがあるので、そういう方式も。

さっきの小ロットでみんな地元のを食べて、それで僕が欲しい小松菜みたいな。味覚なのかどうかは別にして、伊賀の人が食べたい例えばキュウリとか菜っ葉とかという形で育てていくっていう仕組みを作ると同時に、伊賀米も地元で支えるっていう仕組みがあれば、小ロットの部分はずよ、いいなと思います。

ちょっと調査した、集落営農の調査させていただいたんですが、多いところが8割を外部に売ってます。少ないところは、半分ぐらいかな。6割ぐらいが外部に売って、4割は

要するに地元でやっぱり玄米で共有してるっていうのが多いので、全体として見るとです、実は伊賀に住んでると皆さんわかんないかもしれませんが、東にはあんまり米は販売されてなくて大阪方面が多いんですね。

ロットとしては、さっきの話に戻りますけども、ロットとしては例えば新潟コシヒカリとかに、当然比べれば全然数量少ないので、大阪ではある程度の価格が出てても基本的には三重県内の流通が中心になるので、そういう意味ではそこも含めて、10年後の作戦を考えていくっていうのは、必要などころだなあというふうに考えますけども。

市町村レベルでいくとさっきの文脈、小ロットとか地元流通でいくと、そういったところもあるかと思えます。ただご発言の中でちょっと僕、足りなかった、今回ちょっと皆さんで深めてないところは、この10年後の農業の姿ってところをもう少し議論していく必要があるなというご指摘だというふうに思います。

ありがとうございます。

その10年後の姿に行く前にも、これで一巡いただきましたかねご発言。

お願いします。

(中浦順一郎委員)

すいません。伊賀上野観光協会の中浦と申します。

なかなか農業等の分野ではなかなか知識も薄いので、すいませんというところなんですけども、観光のところていくと56ページ辺りが観光に関連するような内容かなと思っ
ていまして。

伊賀の食材等々で、うちは伊賀百貨という売り場のほうの運営をしておりますので、そこでご提供、観光客の方にご提供させていただくようなお店になってます。

ここではストーリー性を持ってですね、伊賀の地域がどんなところで、どんな人がどんなものを作っているかとかというようなストーリーを持って、情報発信やPRをしながらですね、商品の販売をさせていただいたり、また、大阪であったり東京であったりといった大都市圏での観光PRもあわせて行っています。

そういったところで伊賀の魅力を知っていただいて、伊賀に来ていただかないと手に入らなかつたり食べられなかつたりっていうところにつなげていければなあというところ
で考えていまして。どうやってうまく皆様と連携しながらやっていけるかなというところ
を考えているところでございます。

すいません、ちょっと簡単なコメントですけども、ちょっと一旦観光協会としては、その
ようなところでございます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。今幾つか実は聞いたことがあるんですけど、来ていただくって
ところでは、うちの研究室で実は直売所の調査やってる卒論の学生がいて、僕も同席して
すね、ちょっと仮説があつてですね、直売所って普通の一般家庭から買いにきてるだけ
じゃなくて、地元のレストランが買いに来てんじゃないかっていう仮説があつて、実際いた

んですよ。コロナ禍だったので、あんま数いなかったんですけど、ちょっと捕まえてですね、なんでって聞いたら、要はですね、すごく他で見ない野菜を買いに来たと。で売ると。何ですかって聞いたら、要は、市場で仕入れて、おいしいからって売るのは、その人ね、京都の和食屋で修行したんだけど、京都ってブランドがあれば客が来ると。津だところないという。だから、津でしかないものを出さないと、基本的にお客さん来てくれないから、だからここにしかないものを探してるんだと。

場合によっては、パッと見てこれ、すごい変わった野菜だなんてことがあったら、その生産者までいって、どうやって作ってたとかってそういうのを聞いてくるという話をしてたので、多分その同じような話で、やっぱり長い目で見ると、地域文化として、この人たちが食べるものをもってやっていくと、多分他の地域とは違う特色が、同じ菜っ葉でも、例えばキヌサヤみたいなやつも仕立てが変わってくるはずなので、そういったところってというのが、長い目で見ると大事というか、出てくる可能性があるなというふうに感じますので、文脈としては同じじゃないかなと思うんで。

聞きたいのは、伊賀ってインバウンドっていっぱいあるんですか。要するに、外国人いっぱい来るんですか。

なんていうか、報道で聞くとですね、市役所で忍者募集って言って、なんかで観光施設で忍者役募集したら外国人がじゃんじゃん電話かかってちゃったっていうのは報道されますけど。

街歩いてそれほど外国人の人と行きやらないので、インバウンド的なものってのはあまり大きくないのかなとか。

その辺はどうですか。

(中浦順一郎委員)

そうですね。そういった統計を取っている場所がなかなかなくてですね、忍者博物館だけは券売窓口で、どちらからお越しになりましたかっていうのを聞いている中では、やっぱりアジアのお客様が多くて、忍者博物館のトータルの入館者の大体 25%がインバウンドのお客様の割合になっています。

と言いつつもですね、まだ忍者博物館に来ていただくアジアの方は団体ツアーが多いので、バスで来ると次の行程にまた行ってしまわれるっていうのが多くて、欧米系のお客様は、小グループ、少人数でこられるので、そういう方々は街中で回遊していただいたりっていうところあるんですけど。

なかなか忍者博物館にお立ち寄りいただくお客様の中では、もうそのいろんな行程がもう詰め込まれて、身動きがなかなか取りづらいお客様が多いのかなあというところですよ。

やっぱりそういう街中にも入っていただけるような取り組みにもつなげていきたいなとは思っております。

(野中章久委員長)

そうですね。ありがとうございます。

ではちょっと大分ご議論いただいて、皆さん大体何か議論が収れんしてきたので、最後にちょっとだけ、話題変える前にちょっとだけお話しとくと、さっき書類大変って話ありましたよね。そっち実は僕研究しているんですけど、今の生成AIすごいのが出ていて、結構ね、いい塩梅の書類なんかもフォーマットを教えてあげてこのフォーマットでこのお手本で書いてって言うとな、結構いい塩梅で書いてくれるやつがあってですね。

実は事務局の市役所の仕事としても、県とか特に国に出す文章って山ほどヘンテコのフォーマットのやつがおりてきて、みんなてんでこ舞いすることがあるので、そういうのはちょっとお声掛けいただければ、今、やれるような研究者が結構増えてきてるので、やれますよってのがあるので、ちょっと後々この会議では直接ないんですが、そっちの方の可能性が非常に増えてきてるので、はい。ご紹介しておきます。

ChatGPTっていうのがあって、あれが大学のレポートをいい塩梅で作るよっていうんでちょっと話題になったんですけど、正直玄人が見ると、何て言うかな、話にならないよっていうのが実情なんですけど、そっち側のやつ、クロードってやつなんですけど、Anthropicってところが作ってるんですけど、なんかすごいんですよ。

ということで、そっちの方は、技術革新もちょっと計算技術の話もご紹介しましたけれども、ちょっとやっぱり社会的に利用できるリソースが発達してきているので、ちょっと、今できないってことができるようになるんじゃないかなというふうに思います。

だからそういう意味では、ちょっと最後に、最後で時間がちょっと限られていますので、10年後の農業ってところ、要するにこの第3章伊賀の農業・農村の将来像。やっぱり夢のある農業振興計画策定委員会ですからこの辺重要なところで、しかも最初のところなんですけど、将来像とかですね、目指す夢のある農業って辺りに関してもご意見を承りたいと思います。

議論は今回、事務局から紹介があったように、まだまだこれ決め打ちですよっていうのを作るまではまだ時間ありますが、今日かなり収斂したまとまった議論になりましたけれども、その1歩手前で、目指すべき農業、ご意見としてね、米どうすんだって話が出ましたので、ちょっとこの辺のご意見をいただきたいなというふうに思いますが、いかがでしょうか。どなたからでも結構ですが。

(森下光子副委員長)

今回の資料をいただいたときに読ませていただいて、私たちがこれまで2回、3回と議論した中のすてきな回答が、私ほうん納得できるわ、すべてがこれ全部今クリアできなくても、市や県、国が一緒になって、もちろん農業者の私たちも一緒になって、少しずつ前に進めば、この1つ1つの課題に、下に役割、これからすることを書いておられるのを読むと、少しずつ良くなっていくんじゃないかな。

私たちの意見をしっかり聞いてくださった答えを下に書いてくださっているように思ったので、ぜひこれを本当の実現に向けて、いろんな意見がありますが、いっぺんにはで

きないと思いますが、この1つ1つの答えをいかに1年1年クリアしていただけるかが期待するところであります。

でも今回のこの資料いただいたときには、すごく納得のいく答えの出し方をされてるので、うれしく思いました。

以上です。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。他いかがでしょうか。

はい、お願いします。

(村山邦彦委員)

すいません。ちょっと今、10年後の姿あたりと関連して、ちょっと全体像的な話なんですけど、やっぱりちょっと、僕も含めてかもしれないけど、農業に関わっている人ってその農業の枠の中だけで考えているようなところもあるような気がちょっとしていて。

ちょっと私も有機農業の推進協議会みたいな伊賀市でやらせてもらってるんですけど、最近ちょっと一番大きなテーマにしているのが食品残渣とか使って、ちょっと循環をちゃんとやろうみたいな話を考えているんですけども。

どっちかっていうと有機って言うと、そのハイブランドのなんかとかって話ですけど、実際にはもうちょっとその地域全体での資源循環みたいな話で。今さっきの中でいうと54ページあたりで環境負荷低減っていうので、環境負荷低減とか資源循環って言っちゃうと、もう抽象的過ぎて何言っているかわからないみたいなところがあると思うんですけど。

例えば地域のものの給食とかを地域のもので入れて、そこで給食出たごみを地域でちゃんともう1回肥料で使うとかそういった、そうすると農業だけっていうより例えばその環境関係の部署とか、或いは河川のね、草を使うよとか言うとその建設関係とかあると思うので、ちょっとその全体の伊賀市のビジョンなんか、例えば循環って言ったときに食とかそれを生産する現場としての農っていうのがあると思うんですけど。ちょっとその中での位置付けっていうのが、行政はどうしてもある程度縦割りのある部分あると思うんですけど、そのビジョンと繋がるものがもうちょっとあるといいなというか、農業だけ特殊区画っていうんじゃなくて、経済全体の中で、農業がこうやって全体に組み込まれると、地域の農業生きていくよみたいな、ちょっとそういう絵が欲しいなっていうの、ちょっと個人的な印象としては思っています。

その中の1つの切り口として、例えば全体の資源循環というのは、農業という全体の中ではこうだし、学校教育もそうですよね。教育の部署が話しているんですけど、それは農業としてこういう関わるっていう、市の方も部署はあると思うんですけど、それが横断的にこうなんだっていうところがちょっと組み込んであると。

なんか農業だけっていうと、なんかどっちかっていうと、立場が弱いすね。なんかそういうものがあるといいなっていうのをちょっと思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。これちょっと僕も、ていうか、事務局に、役場の方にちょっと聞きたいんですけど。

確かにそういう意味でいくと、例えば何か下水処理の中で活性汚泥使って、何かガスとって何かそれ利用するとか、何かそっち方面の、おっしゃる通り、農業以外での何かリサイクルを具体的に推進する計画があるとか何か方針があるとか、そういうのはもしあればご紹介を、なければないで、それはその経済セクターで考えなきゃいけないってことになるんですけど。

(吉福農業振興課長)

私もすべてすべての実情をこう把握しているわけではないですけども、一部その集落排水の処理施設に併設してですね、コンポストみたいなところがあるような施設であったりとかですね、いわゆる、少し前ですと、水の循環の中でですね、ビオトープみたいなものを併設して作られてる処理場というのも市内にはございます。

ただ全体的にですね、大きくこう循環に取り組んでるかという、ちょっとその辺はまだその下水という部分については少ないのかなと。

どうしても伊賀市の場合は、下水そのもののちょっと整備が、個別浄化槽というのが大部分になってるところもございまして、そういう点で、なかなかちょっと進んでないのかなあというのが多分伊賀市の実情かなというふうに思います。

(野中章久委員長)

ちなみになんか、バイオディーゼルを作っていた時期もあったんじゃないかな。あれ三重大の施設だけですかね。三重大の施設は、何か忍者研究所なっちゃったみたいな話だと思うんですけども、あれはそういう感じなんですか。

(吉福農業振興課長)

そうですね。いわゆる資源循環ということですね、菜の花のプロジェクトというような形で、いわゆるバイオディーゼルは菜種油を使ってそういうふうな形で循環をですね模索してたというのが、おっしゃってくれるように10年以上も前になるのかなと思うんですけども、そういうような形で取り組みを進めたというのものもあるんですけども。

今現在、ちょっとバイオディーゼルの方のところはまだちょっと稼動してないというような状況で、なかなかそういう意味ではその資源循環っていうのはちょっと進んでないのかなという状況かなと思います。

(野中章久委員長)

はい、わかりました。ありがとうございます。

どうぞ。

(森下光子副委員長)

課同士の繋がりをこれからもっと重要になってきますよね。環境関連の課も、農業振興課も農業委員会も、すべての課が。さっきの高校生じゃないですけど、住むところも心配

やというようであれば空き家対策課がある。

そういうみんなの課が共有して、横の連携をしっかりとって、縦でなしに横の連携をしっかりとって、情報の共有をし合って、情報をみんなに提供してあげる。

先ほどの高校生の疑問も、ちょっと皆さんの、こういう委員会で言うたってなしに、こういう解決方法があってこういうのが今市が施策してますよというような答えの出し方で出してあげて欲しいし、だからそういう疑問が来たときに、いろんな課が共有してる中で答えを出してあげられてたら、早く答えを出せるかなと思うので。

しっかりと横の線を、私たちもですが行政においても横の線をしっかりと結んでおいていただければありがたいかなと思います。

(野中章久委員長)

すいません、具体的な話になってて恐縮なんですけど、牛の方だと、堆肥施設とかを市で持ってるとか、或いは農協さんが稼働させる、そういうふうな運営方法はどうなっているのでしょうかっていうのをちょっとお聞きしたいんですか。

(川瀬成清委員)

この伊賀牛に関しては、堆肥施設はJ Aが運営しています。それ、J Aが運営しているところについては、他にも、九州の方行ったら、一部ありますけども、珍しいというふうな施設。

(野中章久委員長)

そういうのを、要するにもうバックアップしてくっていうのも、ちょっとご指摘のところ、あろうかと思います。

生ゴミは堆肥にするの大変なんですよね。やっぱりそのね、牛とかの堆肥施設にまぜ込んで、材料まぜ込んでいくとかっていうところがないとうまく多分堆肥化ってのはちょっと技術的に難しいんじゃないかなっていうところがあるので、その辺はだからそういう意味では逆に他の産業分野じゃない他の経済セクターじゃないんですけど、農業の中でもリサイクルというのを強化するっていう方向で、考えていただくといいのかなっていうご意見だと思いますけど、そういう理解でいいですか。

(村山邦彦委員)

多分、もしくは先生ご存じないかもしれないですけど、伊賀市にエム・シー・エスさんっていう、もう西日本でも最大級の食品残渣の堆肥工場があるんですよ。で、しかも伊賀の有機農家って3億ぐらい売ってるんですけど、その大半の人が使ってるんですよ。

しかも、給食ごみをエム・シー・エスさんにとってるので、循環って基本的に有機の物が給食に入れば、もうかなりの、全国的にもトップレベルの循環ができてるんですよ。この辺が全くもう触れられてないし、何となく抽象的な環境、資源循環みたいな言葉で言っちゃうとあまりリアルじゃなくて、その時に、例えば農業だけの観点からじゃなくて、例えばそのエム・シー・エスさんの管轄って農業じゃないですから。そういうところと一緒に連携して、市として今これからの時代どういうビジョンを描くの、その中でどういうの

が農業としての位置付けなのっていうのが、こっちの側からも何かこうするものがある
といいなという、実際もう民の方から動きはあるんですけども。その辺がちょっと拾っ
て欲しいなという部分があったんでちょっと申し上げたところです。

事業系ごみですね、生ごみ、今おっしゃったように難しいし、この2月には、一応東海
エリア全体で、生ごみ残渣も含めた農業への、化成肥料も高くなってるんで、それをどう
利用したらいいか、非効率窒素成分考えましようって勉強会熱心に伊賀やってるんです
よ。

その辺も含めたことがちょっと入ってくるといいなと思ったのもあるので、ちょっと
出させていただいたような感じです。

(野中章久委員長)

なるほど。それはもう事業ベースでやって、市の施設、市の要するに委託事業でやっ
ているってわけではないですよ。

(村山邦彦委員)

ではないです。そうです。だから、総合政策とか、そういう意味で、今これが位置付け
られているので、稲森さんがどこまでどういうふうを考えられているかわからないです
けど、ちょっと伊賀市が循環とかって言ったときに、その大きなストーリーの中で農業も
これが位置付けられるとか、そういうストーリーになってると、なんか農業だけの話でし
よっていうんじゃないかって、他部署のリソースも使ってできるんじゃないかなみたいなこ
とを思ったんで、ちょっと他部署ともうちょっと積極的に連携して、何か単純に循環てこ
こで切っちゃうんじゃないようなことが書けるといいなっていうの思ったって感じです。

それは汚泥でもそうですし、河川の草でも一緒ですけど、農協さんとか十分されてるこ
と、牛糞とかもあると思うんですけど、活用促進みたいなことができるといいなという。

このストーリーだけじゃなくて、実際の施策に何か触れそうなあたりの書きぶりにな
ってくれると嬉しいなというところです。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。どうぞ。

(泉川道子委員)

すいません、私も具体的なノウハウのところは今後向かっていくんだろうなって、まず
はこうやって概念っていうか、理想を語った後に。なので今エム・シー・エスの話もそう
なんですけど、民レベルでいうと、例えば、今愛農はマルタマフーズっていう給食やって
る会社とちょっと連携させていただいたりして、それがフレイル予防っていうその高齢
者の方の健康活動とかも多岐に渡ってされてて、そういういろんなことをしている民間
のエム・シー・エスもそうですけど、ところのノウハウも活用しながらいい意見を出し合
って、今度はより具体的に、どういうふうにしていくのかっていうことが、今後語られて
いくといいなって思いました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。ほか、この件に関してございますか。

今、議論の中でね、化成肥料は、いや僕もだから、もう調達できない世界が始まっちゃったよって話でいくと、化成肥料もどんどん値段が上がりますから。もう利用できるものはどんどん利用しないと。農業もね。農業、結構エネルギーと化学薬品使いますからね。

ということなんで、いかがですか。この辺は、そういった意見が強いというところで、結論といいますかね。これ大体皆さんの認識だろうということでもよろしいでしょうかね。

ほか、ございますかね。お願いします。

(山田長生委員)

前回アカデミーの関係について。先ほど土地改良区さんから意見のあった、その集落の後継ぎというか、事業継承がなかなか難しく、それこそ10年先どうなっているのだろうかというか、高齢化で、どんどん営農する人が、今はまだ体が動くので機械を使って田植えとかしているけれども、そのうちできなくなったときにどうなのかなってというのが、非常に私も気になっています。

地域の、農村の振興とか田畑の保全っていう意味では、営農組合さんが核になるかなと思うんですけども、今の集落の中で農業されている人はどんどん高齢化して、後継ぎがいるところはいいですけども、していけず誰か頼むことになり、誰にも頼めない、あるいはなかなか頼める人と考え方が合わないというところがあると、それこそ本当に中山間地はどんどん放棄地が増えて、田に山というか灌木が増えてくこともあるのかなと気にしています。前回アカデミーの話があったということで、私としては、そこに踏み込めるような人というか、地域の中で集落営農の関係をどうしていいかわからない人とか、或いは集落営農に住んでいる人の中で何とかしないといけないという人がいて、例えば外から来た人であってもいいから、その計画を作るというふうな人が現れて、当然地域の信頼を得て引っ張っていくような、そんな人づくりの仕組みがあると、もしかするともう少し存続してく場所もあるのかなと思います。

今は、県の農業改良普及員とか、地域に入って頑張っていますが、我々職員もなかなか人手も足りなくなる状況の中で、もしかしたらアカデミーの中で、そういう意欲がある人達がセミナーなどを受けて、いろんな全国の事例とかを知る、それで、例えば大学の先生、或いは専門家からアドバイスをもらう、また、意見交換して、こんなことしたら、こんなことでどうかなっていうのに答えを返してくれるようなそんな仕組みがあると、もう少し今よりも進むところもあったりするかなと思うので、私としては、新卒者ばかりではなくて、そうした人づくりの仕組みというのもあった方が、10年20年後、この田んぼとかこの畑をどうしていこうか分からないというようなこともなくなっていくんじゃないかなと思ったりします。まだこれからの議論かもしれませんが、資料を見て思ったので、意見をさせていただきました。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。大体このぐらいの時間ですかね。

大変恐縮なんですけど、委員長権限で、ちょっと5分程度休憩をとってよろしいでしょうか。

では休憩とさせていただきます、すいませんよろしくお願いします。

(午後3時52分 休憩)

(午後3時55分 再開)

(野中章久委員長)

会議を再開します。議事を進行するというので、次、タウンミーティングに関してのご説明ですかね。

これは事務局の方から説明ですね。お願いします。

(大谷農業振興課主事)

失礼いたします。資料③をご覧ください。

これまでの委員会でもご協議いただきましたが、伊賀市夢のある農業振興計画の中間案について、市民の皆様や農業関係者の方などと意見交換を行うことを目的として、令和8年7月11日土曜日にタウンミーティングを開催予定です。

その具体的な実施方法について、株式会社フジヤマ様よりご説明いただき、その後当該説明内容について、委員の皆様からご意見等を頂戴したいと存じます。

説明は以上でございます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。タウンミーティングの話はこの間出てますから、ご異議ないかと思えます。

早速、フジヤマ様の方からお願いします。

(株式会社フジヤマ)

それではタウンミーティングの内容について説明します。

資料③の3ページお願いいたします。タウンミーティングの内容、ワークショップを想定しております。

まず目的なんですけれども、書いてある通りに、本日紹介させていただきました計画案の将来像の実現に対して、市民との意見交換を行って、市民の皆様からの意見をいただきまして、それが今現在検討している将来像の案に一致していたらそれでよしですし、ちょっと違う意見をいただいた際はその意見を反映するっていうところを目的としております。

2番のワークショップの手法なんですけれども、白い模造紙に意見を付箋で貼っていただき、その市民の皆様意見を可視化していくという方法を考えております。

3番の意見交換内容なんですけれども、具体的には、最初にワークショップの説明をした後にですね、(2)ですね、ワークショップ50分程度と書いてありますが、まずは①番でアイスブレイク、皆様初対面の方々ですので、まずは、テーマ①として、伊賀市の好き

なところについて、それぞれ参加者お一人ずつ発表していただいて、そのあと②番のワークショップ、4ページお願いいたします。将来像に対する意見交換をできたらと考えております。

ごめんなさい、申し遅れたんですけれども、ワークショップについては、グループごとにグループワークとして、それぞれ5、6名が1グループになるように組んだ上で、アイスブレイクの後、ワークショップを進めていくという流れを考えております。

ワークショップにつきましては、4ページの通りなんですけれども、タウンミーティング用に計画の概要版を作成して参りますので、その概要版に将来像とかを載せますので、それに対して意見交換をしていただいて、最終的に意見、将来像実現のために必要な施策はどれですかみたいな形で話を進めていけたらという想定で、現在考えております。

(3)の通り、最後はそれぞれのグループで出た意見などをみんなで発表し合って、参加者全員で共有できればという流れを考えております。

説明は以上になります。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。

皆様にご参加をお願いしてですね、ご都合の悪い方いってくださいということで、何かご都合の悪い方いらっしゃらないという前提のようですので、参加いただけると、委員の皆さん参加いただけるということになろうかと思えます。

あと具体的な手順に関してはもう当日なりであると思えます。1点あらかじめいうかちょっと強調しておきたいんですけど、ファシリテーターをやるってことになるんですが、模造紙に書くとかってというのは、フジヤマ様がついていただけるわけですね。係の人がね。なので、座長的なといいますかね、司会的なところで、皆様に進行を図っていただければいいかなというふうに思えます。

それと、模造紙にその意見を書くとかまとめるところあたりも、手法的にはフジヤマ様がお得意のところですので、委員の皆様にはご安心して、ちょっと大丈夫できる、みたいなことはないというふうに断言できますので、よろしく申し上げます。

どっちかというところ、スケジュールで見るとですね、伊賀市夢のある農業振興計画についての説明とかですね、講評っていうのは、なんか僕の手間多かったりするんですね。大丈夫かな、暴走しないかなっていうのが心配なところですけども。はい。

市民の皆様にご理解いただきながら、意見をいただくっていうのが眼目ですので、難しいことするわけじゃないよというところです。

これに関して、どうでしょうか。ご質問とかご意見とかございましたら伺います。

どうぞ。

(藤森農業振興課主幹(農業政策担当))

失礼いたします。事務局から1点だけ、ご連絡というかお願いをさせていただきたいと思えます。

先ほど、ファシリテーターとかあったタウンミーティングの参加、委員の方の参加について、委員長の方からご説明いただいたところでございます。

前提として、先ほど委員長も申し込まれていた通りですね、参加いただけるってことなのかなと認識しておるんですけども、一応最後に、参加の可否を取りまとめだけさせていただきますと思いますので、またメールをさせていただきます。それに返信する形で、ご返事だけいただけたらと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(野中章久委員長)

ありがとうございます。よろしいでしょうか。

今日の議題は、大体このぐらい、あとその他がありますけれども、委員の皆様その他に入る前に、あの時これ言い忘れたとか、これは是非もう1回言いたいとかあれば承りますし、その他としてはこれ議論すべきだというのがありましたら、ご提案いただきたいと思っておりますけど、委員の皆様大丈夫でしょうかね。

よろしいでしょうか。

(発言無し)

(野中章久委員長)

事務局から何かございますか。

(発言無し)

(野中章久委員長)

ないようでしたらこれで、今日はすごくいい議論できたかなというふうに思います。引き続きよろしくお願いいたします。

計画の素案という形で出てきました。これからもっとブラッシュアップしていくことになろうかと思っておりますので、皆様、引き続きよろしくお願いいたします。

それでは、これで閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

(午後4時4分 閉会)